
奇譚—大地を翔る

蝶佐崎ダイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奇譚―大地を翔る

【Nコード】

N0139J

【作者名】

蝶佐崎ダイ

【あらすじ】

青年は様々な人間と出会い、己の在り様を自覚していく。幼馴染も、同じく。しかし二人の事情など関係なく、祖国は戦火に巻き込まれていく。突如村に現れた親子は、いわれの無い罪で国に追われていた。遅くなって済みません。

P r o l o g u e (前書き)

P r o l o g u e 序章

Prologue

雲が早い。

風が、寝転ぶ俺の髪を乱暴にかき上げていく。

ざっ、と側に誰かが立つ音がした。

「しゅーっ、っと」

「何だ、龍か」

隣に寝転がったのは萩原龍^{はきはらりゅう}。俺の幼馴染みで、俺より一つ年を食っている。デカくて、運動神経が良くて、ついでに頭が良いのか悪いのかよく分からない。褒めてないだと？ 何故俺がこいつを褒めねばならんのだ。

龍が学校の先生に怒りの鉄槌を食らった数は数え切れない。ある時ぱったりと更新が止まったが、それは龍が逃げ方を学習したからだ。ついでに龍が棒術^{ばっしゅ}を修得したからでもある。

悪戯が大好きな悪ガキ。それが大人の奴に対する印象だろう。

因みに俺は浅倉修^{あさくらしゅう}。十四歳。背は一応平均だ。自慢じゃないが、口論で負けたことは一度としてない。胸を張って言える、俺は体は弱い、一般人だ。

それはさておき、俺は嬉しそうに草原の上で伸びをする龍に声をかけた。

「どうかしたのか？」

「ん？」

何が？ と首を傾げる奴の長い長いアホ毛が揺れる。少しイラッときた。

「何かあったのか？」

「ねーけど。修が草原で寝転んでるって聞いたから、暇だし来て見ようかなと」

何も無いのかよ。

「気持ちが悪いな」

「ひでーこと言うなあ！ 俺だって寂しいことぐらいあるっての」

「お前に？ 何か道端の物でも食べたか」

「食べてない食べてない！ 俺は五歳児じゃねえ！」

龍はすっかり突っ込んでから、ふっと寂しげな笑みを浮かべた。

「ま、あるっちゃ、あるな」

「……何の用だ」

俺達が住む湖月村^{いづみづき}。首都から近く、他の辺境村に比べれば治安はいい方なのだろう。

国の名は葉仙^{ようせん}。周辺諸国と比べても歴史はとても深い。それなりに軍隊も持っているし、周りの国相手に立ち回ることもしばしば。何にせよ、周りの国とは上手くやっている方だと思う。

俺がこつそりあいつを見ると、龍は空を睨んでいた。

「俺さ、何年後になるのかは知らねーけど、旅に出ようと思うんだ」

「……それで？」

龍の両親は亡くなっている。少しの間、俺の親父に生きる為のお金は賄ってもらっていたが、今では自分で稼ぐほどになっていた。ギルドとやらを使つて。

そのギルドとやらがどうなっているのかは分からないが、それにランクも高い、魔獣を相手にすることも多いのだと聞く。それくらい、龍は棒を扱うことに上達したのだとも実感する。

そして、今の話は。

「ギルドとやらで金を稼ぐのか？」

「おう。ギルドはこの国に行っても各地に建ってるしな」

俺は龍を睨んだ。

「絶対、魔国には行くなよ」

龍は俺を見て、笑った。

「当たり前だろ」

魔国。まじくそこは魔族と呼ばれる生き物が支配する国。人間を奴隷、

労働力として扱い、人さらいの大半が魔国に人間を売っているとも聞く。ちなみに正式名称は別にあるんだが、長すぎて忘れた。

もし龍が魔国に捕まったら間違いないく戦奴隷あたりにされる。

魔国は今、人間の国を併合させて北上中だ。その先に葉仙国も存在している。

龍が軍に入ったら、葉仙は魔国になんか絶対負けないのに。

その言葉を、俺は呑み込んだ。

もし俺がワガママを言ったら、こいつは自分自身の願いなんか無視して軍に入りそうだから。

「修？」

「そうか」

無表情で言うと、あつけにとられた顔で見返してくる。

「驚かねえの？」

気ままに暮らすのが大好きな龍だ、そんな気はしていた。改めて突き付けられて、動揺しているだけだ。

「俺もいつかは町を出て行く。大人になれば、仕事を求めて。その時期が早まったただけだろう」

「はあ……要するにいつかはみんなこの町を出ていくと。出世を求めて」

「ああ。寂しい話だけだな」

俺も数年したら公務員になると決まっている。親父の家系が軍人で、俺は剣を扱えないから別の形で国に仕えろと言われていた。

やっぱり少し、いや、かなり寂しい。

「……一度だけ聞かせろ。本当にいつか、旅に出るのか？」

俺の問いに、龍はあえて問いで応^{こた}えた。

「修。一緒に旅に出ないか？」

俺達は見つめ合う。睨み合っているのかもしれない。

昔から変わらない。くりくりとした、純粹で何の汚れも知らない、見る度にきらきらと輝く、真っ直ぐで一途^{いちず}な瞳。

俺のような、社交界で人間のドロドロした部分を見せられていた人間なら、眩しくて敵わないような。

視線を逸らしたのは、俺からだった。

「……まだだろう？」

「おう」

龍はにっと笑い、空にタコだらけの手を伸ばした。

「ま、のんびりするさ」

俺は何も答えられなかった。

——それから二年。俺達は相も変わらず、同じ日常を暮らしていた。

彼が来るまでは。

Prologue (後書き)

どうも、一つ書いている最中なのに別の話に手をつけた蝶佐崎です。妄想が膨らんで、我慢できずに投稿してしまいました。ですが正直、この後どうするかとか全く決めてません。ばちばち投稿していくつもりですが、いきなり消えたり更新が途絶えたりするかもしれません (orz

ご指導ご指摘をしてくださると、非常に喜びます。よろしく願います。

Meet (前書き)

Meet : 会う

Meet

風が強い。奇しくも、龍に旅に出ると告げられた時のように。集めていた枯れ葉が目の前で風に乗って飛んでいくのを見て、イライラと空を睨む。

風は大嫌いだ。連れていってしまふ。
ふとそう思ったとき、馬の嘶いななきが聞こえてきて、俺は慌てて奴を迎えに行った。

「龍！」

予想通りと言うか、何と言うか。

龍は俺の心配通り、血まみれの姿で立っていた。

駆け寄った俺に笑いかけた奴は、じゃん、と金貨の入った袋を掲げる。

「千！」

「それがどうした！ 怪我したら意味無いだろうが！」

俺が龍の頭を叩くと、奴の背中から血が噴き出した。慌てて拭う俺をよそに、龍は嬉しそうに、また冒険談を語ってくれる。

「今回は二つ向こうのリーヌン国に行つてな！ 内容はちとセコいんだが、畑を食い荒らす山嵐ヤマアランの討伐！」

山嵐というのは砂地に生息する生き物で、背中に針を持っている。危険を察知したら、頭をお腹の下に潜り込ませて丸くなり、トゲのついたボールのようになる。

だが、剣はボールの上からでも突き刺さるし、そんなに危険な生き物でもない。

「じゃあ何でこんなに怪我をする！？」

「山嵐の子供って目がクリクリしてて可愛くてな！ 頭撫でてやろうと思って手を出したら、そばにいた親に攻撃された」

「ド阿呆！」

背中を蹴りたくなってきた。

龍は最近、というか去年から、自分の腕を試すと称して無茶な依頼に手を出すようになっていた。今回の山嵐は不注意だが、こうやって傷をこさえて帰ってくることも多い。

流れ者の傭兵や旅人が来れば必ず一騎討ちを挑み、更に負けたことが無い。

時折「俺が最強だ！」と言わんばかりの言動をかますこともある。俺としては、そうほざくのも五月蠅い。

だがそれよりも、龍が手に負えない仕事に手をつけて帰ってこなくなったらどうしようと、そう思うのだ。

杞憂に終われば嬉しいが。

怪我が意外にも多く、さらに深いことから、俺は厳戒体勢で龍の傷を治そうとうちの屋敷に放り込んだ。ついでに馬を繋ぐ。

機嫌の悪かった馬を繋ぎ終え外に出た俺は、村の外から誰かが来るのを見た。

馬。二人乗り。前によぼよぼのお婆さんを乗せて、彼女を抱き抱えるようにおっさんが手綱を操作しつつ後ろに座っている。

よく見ると、お婆さんはかなり疲弊しているようだった。

おっさんはお婆さんの容体にかなり焦っているようで、俺を見つけてすぐ、馬を早歩きさせて俺の前に来た。

「済まぬが、そこのお方」

俺はお婆さんに手を差し伸べてから、目だけおっさんに向ける。

「話はお婆さんを休ませてからにしましょう。布団を用意します」

おっさんはしばらく啞然として棒立ちになったあと、勢いよく頭を下げた。

「済まない」

進と名乗ったおっさんは、何やら言えない事情があつて、お母さんを連れて首都から出てきたのだという。

言えない事情について進さんは、身の潔白は証明できる、しかしそうしたところで母に迷惑がかかるのは忍びなかった、そう言い切った。俺には悪い人には見えなかったので、理由を問い詰めることもしていない。

「知り合いを頼つて北に向かう所でした」

話し方も対等に、しかし丁寧^{ていねい}に話す。

「そうですか。しかし御母堂^{ごぼどう}に慣れない馬旅は、とても辛いものがあつたと思います」

俺も一度龍にやつてもらつたことがあるが、かなりキツイ。太股や腰まわりの筋肉が痛いのはなんの、冗談ではないほどだ。それを二日まるまる、しかもご老体の体でやってしまうと、精神的にも肉体的にも参つてしまうだろう。

正直、よくお婆さんは弱音を吐かなかったなと感心したぐらいだ。それを指摘すると、進さんは唇を嚙んで俯いた。

「……配慮が足らなかった」

いや、そんなの言われても俺知らない。

「急がれていたようですが」

「ああ。追手が来るかもしれないと言われていて」

誰に言われた、とも話さない。大方部下か友達なのだろうが、進さんは案外それなりに偉い人だったのかもしれない。

親父みたいな硬派にしか見えなかったもので。……たいていこのタイプは組織に入ると上部に目をつけられて左遷されるからな。考えていると、進さんは思わずといった様子で笑みを溢した。

「武術一辺倒だった私にも、大切な友人がいたと思い知らされまし

た」

「……そうですか」

友人の方だったか。

思考を纏めた俺は立ち上がり、話を聞いていた部屋から出て進さんをお婆さんの部屋に連れていった。

「最低三日」

進さんははつと俺を見て姿勢を正す。

「進さんは急いであられるように見えます。ですが御母堂にはできれば何日も療養が必要に見えます。急いであられるのでしたら、最低三日、この屋敷でお休みになられて下さい。父は首都に出向いており、現在私が名代を務めておりますので、何か不備があらましたら屋敷の者に伝えてください」

お婆さんの負担を鑑みての俺の判断に、進さんは俯いた。

「何日おられても構いません。むしろ好きなだけ療養して下さい。」

また、金銭も受け付ける気はありません」

「いや、それは……！」

俺がにつこりと笑うと、進さんはしばらく固まったあと、苦笑を漏らす。

「……どうもこの屋敷に来てから頭を下げてばかり、いやお世話になつてばかだな」

「人間そんな者ですよ」

ぼろぼろの服装から旅費も無い、とりあえず慌てて飛び出したのだとも分かる。そんな人からお金を巻き上げるつもりは無い。

お人が悪いと溢した彼は、ふと俺を見て尋ねた。

「今更ながら、お名前は？」

「修と申します」

暗に名字を名乗らなかつた進さんへの当て付けを含めつつ。

そんなこんなで俺は龍を含めた三人を屋敷に泊めることになった。親父が帰ってきたら爆笑しそつだな。

E n c o u n t e r (前書き)

E n c o u n t e r : 遭遇

Encounter

翌日、進さんが落ち込んだ様子で佇たたずんでいたので声をかけた。

「どうかされましたか？」

「修殿」

二人で縁側に座ると、進さんはぽつぽつと話し始める。

「母は私が数日泊まることになったと話すと、食事もとらずにまた寝てしまいました」

お婆さんの負担はかなりのものだったのだろう。進さんはそれに気付けなかった自分を悔いているように俺には見える。

「ご老体には、睡眠が一番の薬だと聞いたことがあります。ゆっくり休まれたら宜しい」

「はい」

春の日が暖かい。

確認したいことがあったので、俺はさりげなく話題を変えた。

「路銀ろぎんは一体いくらお持ちで？」

無言になったことから、あまりお金を達者にもっていないことも分かる。

本当に慌ててたんだな、と少し苦笑した俺は話を切り出した。

「武術をされていたとお見受けします。ギルド、という施設をご存知ですか？」

確認したいことについて。一つは、進が何らかの武術を習っていたこと。もう一つは旅費の金額。

全く知らないと言われる彼に俺が施設について教えると、進さんは少し顔を明るくさせて頷いた。

「幼馴染みがそこで働いていまして。コツコツですが、支部も沢山ありますから路銀の確保もできるかと」

ただし、身に重すぎる依頼は今うちで隔離中の馬鹿たれのように怪我を招きかねない。それも踏まえて話すと、進さんは馬鹿たれに

興味を持ったようだった。

「その怪我の方は……」

「治るのは早いのですが、よく傷をこさえて帰ってくるので」

「そうですか」

進さんはあつさりと言いたが、何かあるなと俺は少し不安になった。

それから二日経って、お婆さんの容体は少し落ち着いていた。様子を見に俺が顔を覗かせるたびに頭を下げられる。

ついでに、龍の怪我也綺麗さっぱり無くなった。直ぐにでもギルドに走りそうな様子だったので、叱^{しか}つて村から出られないようにしておいた。また何度もぼんぼんとあんな傷作られてたまるか。

進さんも人に顔を見られるのが困るのか、旅費を稼ぐためにギルドに向かう以外、滅多に屋敷を出ない。

——そのせいだったのだろうか。

お婆さんが安眠されていたのを確認した俺が縁側に座っていると、進さんがやってきた。俺に気付いて顔を輝かせる。

「修殿」

進さんは俺に笑顔で金貨を押し付けた。

「これは？」

「稼ぎました。旅費もある」

要するに宿代のつもりなのだろう。

しかしこういう天然さんは、たいていが食事のことやこれからの宿代を考えていない。

「お断りします」

金貨を押し返すと進さんがまた何か言おうとするので、先に言った。

「これからの食事代は？」

目に見えて進さんが固まる。

「宿代もですね。野宿されるおつもりですか？」

それは、と落ち込んだ彼が少し面白い。

「気持ちだけ受け取っておきます」

「……かたじけない」

こういう人は嫌いではない。何か役に立てたら、と無給むきゅうの身で思ってしまう。

それだけに、何故人柄の良さそうな彼が何者かに終われているのが不思議になる。

進さんが隣に座るのを見て、何か嫌がる反応があればすぐに話を変えようと身構えつつ、俺は話を切り出した。

「進さんは何故追われておられるのですか」

進さんの口元が強張る。

しまった、まだ聞くには早すぎたかと焦る俺をよそに、仏頂面になった彼は黙り込んだのち、撤回しようとする俺を遮って首を振った。

「修殿に迷惑がかかつては、礼どころではありませぬから」

そう言った進さんは真っ直ぐに俺を見る。

「……進さん」

俺が口を開いたその瞬間。

不意に、門の方から叫び声が聞こえた。

「！？」

ぎょっとした俺をよそに五人、となり村のチンピラが屋敷の門から飛び込んでくる。さりげなく、進さんが俺を庇かばうように動いた。もうひとつ、雄叫びが上がった。龍が飛び込んできた。上半身はシャツ一枚、下半身はズボンの出で立ち。シャツは袖の無いやつで、引き締まった腕の筋肉が見えている。棒を構えていた。

「おいこら、よそ者がこの村で暴れるなんざ、俺が許すと思うか、

ええ！？」

そして村から出られないせいか、機嫌が悪い。そしてイライラを
発散したくてたまらなかったようにしか見えない。矛先を向けられ
たチンピラに同情したが、悪さを働いたこいつらが悪い。

「この萩原龍、容赦はしねーぜ！？」

E n c o u n t e r (後書き)

修は武術に関して全くのド素人です。

Quarrel (前書き)

Quarrel... 口論する

Quarrel

勝負は見えていた。最初に入ってきた五人はただ棒を振り回しているだけだが、若者にはかなりの心得こころえがありそうだ。そう、進は見えていた。

気合いが交錯した。ひとりふたりと打ち倒されて、そのたびに若者は誇示するように、頭上できくくると棒を回した。

四人目が打ち倒された時、五人目は棒を放り出し逃げようとした。若者は棒を投げ、その男の背中に当てた。

「馬鹿なことを」

思わず、進は言った。若者の顔がこちらを向く。

「あんた、俺が馬鹿だって？」

「君を馬鹿と言ったのではない。棒を投げるのが馬鹿げている、と言っただけです」

「龍！ この人は客人なんだぞ！」

修が慌てて二人の間に入ると、若者はちょっと意外そうな表情をした。

「修の客人？」

「そうだ、無礼なことは言うなよ」

「良いのです、修殿。馬鹿げているのは確かなのですから」
若者がまた進を睨む。

「また言ったな。何で馬鹿が説明した上で、俺と立ち合え！」

「いかなる場合も、武器を手から離してはならん。自分の腕を切り離すようなものですからね。投げてかわされると、素手で相手と向かい合うことになります」

「分かった。でも、それなりの心得があるんだろうな」

「馬鹿げている説明をしろと言われたので、したまです。立ち合いはお許し頂きたい。修殿の御友人に怪我でもさせたら、申し訳が立たぬ」

「今何つつた」

若者の目が光った。進に棒を突き付けてくる。先ほどの五人は這うように去った。若者はずかずかと進に近づいてきた。

「あいつらが捨てていった棒を執とれよ。それぐらいは待ってやる。ここまで言われたんだから、立ち合わずには済ませねえ」

「しかし、修殿」

進は修の方を見る。

「御友人に怪我でもさせることになる、恩を仇あだで返すということになってしまいます」

そう言った進の言葉が、さらに若者を逆上させたらしい。

「構いません。龍が骨を折ろうが、それはこいつが招いたこと。できれば鼻をへし折ってほしいのですが、出来ますか？」

「私は素手でも構いませんし、そこらに転がっている薪まきの一本でも良いのですが……それでも御友人は怪我をされるかもしれない」

また、口が禍わざわいしている。そう思ったが、やめることはできなかった。昔のころの癖は抜けないらしい。

「俺に、薪一本で立ち合うだって」

「構いません。私からお願ひします。もし龍の鼻をへし折れるなら、是非そうしてやってください。できないなら、これ以上何かを言うてこいつを興奮させないでください」

「分かりました。できるだけ怪我をさせぬよう、やってみましょう」
「おい」

薪を拾いかけた進に、若者が言う。

「棒を執れよ。薪っていうのは、立ち合う前から俺への侮辱だ」
「……では」

進は落ちていた棒を拾い、若者を見据えた。

「棒で勝てば、薪。薪で勝てば、素手ということにいたしましょうか」

Quarrel (後書き)

大した内容ではありませんが、あらすじを少し変更しました。
あと、本編とは全ッ然関係ありませんが、

Merry Christmas!

訳の分からないことになった。修こと俺は離れて二人の立ち合いを見ているしかなかった。

進さんの言葉に龍がキレたのは分かっている。

できれば、龍に負けてほしい。このままでは、いつかどこかの輩に殺される気がしてならなかったのだ。

龍が両手で捧げるようにして、棒を構えた。二人が向き合う。何やら、あいつが普段言っている気とかいうものが吹き出ているような気がする。

片手で棒を持ったまま、進さんは一步踏み出した。龍の棒が、ぐりりと一度回った。もう一度進さんが踏み出した瞬間、打ち合いが始まった。進がかわして、位置が入れ替わった。龍の目が、光を帯びている。

龍の頭上で棒が二度、三度と回り、打ち込んだ。はじめて進さんが棒を低く構えた。そして龍に歩み寄り、すれ違った。

龍の手から、棒が落ちていた。進さんの棒の先は、龍の眉間に突きつけられている。龍の体から、汗が噴き出した。

「棒を、拾われよ」

言った進さんは棒を捨て、転がっていた薪を拾い上げた。彼はそれを逆手に持つようにして、龍に突き出した。

龍の全身にまた緊張が走った。龍の棒が進さんの薪を叩き落とそうと、目まぐるしく動いた。進さんは構えを変えずそれをことごとくかわす。はじめて龍が口を開けて、肩で大きく息をした。

呼吸が終わる瞬間、進さんはまた龍に歩み寄り、腹の真ん中を薪で突いた。吐ききった息を、龍は吸えずにいる。うずくまったあいつの肌が、みるみる紅潮した。進さんは薪で脇腹を軽く打った。し

ばらくして、龍は呼吸を始めた。

「もう一度、棒を拾われるがよい」

薪を捨て、進さんは言う。龍は信じられない、という表情で立ち上がり、棒を構えた。

「私が素手であることは、気にする必要がない。どこからでも、打ち込んでこられよ」

龍の打ち込みに、進さんも踏み込んだ。龍の体が宙を飛び、地面に落ちた。跳ね起きた龍を、彼はまた投げ飛ばした。十回を越えて地面に叩きつけられ、龍は両手について動かなくなった。

「私の言うことを、認めていただけますか。得物えものを、手から離してはならないのです。それは体の一部なのですから」

立ち上がった龍は、家の方へ駆け出していった。

「修殿、御無礼をいたしました」

「いえ、こちらへ」

俺だって、初めて龍を負かした存在を発見して、かなり浮き足立っているとは自覚している。でもやっぱりお話ししたい。

家の奥へ連れていき対座すると、進さんはやや怪訝けげんな表情になった。

「なにも知らず、ご無礼をいたしました。あいつを打ち負かしてくださったのは、後にも先にも進さんだけです。流れ者の傭兵や旅人が来れば必ず一騎討ちいっきうちを挑み、更に負けたことが無く、熱心に練習したので腕も上がり、時折、自分が最強だと信じている節もありました」

「失礼ながら、私にもそう見えておりました。御友人ごゆうじんの技があまりに危なげなので、御親切のお礼までに、口を出しただけです。恨まれても、お教えするのがよい、と思ったからでもあります」

この人も、龍の危うさに気付いていた。

「ああいった危うい強さは、いずれ身を滅ぼしてしまいます。少しでもそれを指摘できて、良かった」

「失礼ですが……」

俺は、進さんの素性が本当に気になる。

「貴方は、一体？」

進さんは苦い笑みを浮かべ、首を振った。

「ただの武術家ですよ」

はぐらかされて、また俺はうつむく。進さんはそんな俺を見て、失礼ですが、とさりげなく尋ねた。

「修殿は、女人ですね？」

「はい。よく男と間違われます」

大抵の人間は俺を男だと勘違いして肩を組み、柔らかに驚いて俺が女だと知って更に驚く。悪かったね一人称が俺で！

「だから、武術は習われていないのですね」

「女であることに加え体が弱いことも相成って、父が許してくれませんでした」

「娘の身体を気遣う、良い父親です。私は娘もおろか、嫁をめとる時期も過ぎてしましまして」

照れくさそうに言う進さんが、また身近に見えた瞬間だ。

「大丈夫ですって。まだいいお嫁さんなら見付かりますよ！」

「いや、連帯する気もありません。余生はどこかの山奥で静かに暮らすつもりでいます」

山奥か。でも進さんならあり得そう。

「どこか？」

「南の延安府に知人がおりまして」

延安府だと、この湖月村からも結構近い。そばにまだ賊に入られていない山……たしか子午山と言ったかな……があつたはずだ。進さんたちはそこを開墾して暮らすつもりなんだろう。

「あそこは良い土地です。そばに梁山湖がありますから、魚も多くとれますし」

「そうも聞きます。ですが……」
進さんの笑みが陰った。

「梁山湖に住み着く賊徒が、村人の漁を襲いに来ると聞いたことがあります」

V
S

E
x
p
e
r
t
(後書き)

Military (前書き)

Military: 軍隊

Military

葉仙最大の湖、梁山湖^{りょうざんこ}。緑も豊富で、魚もよくとれてしかも上手い。

梁山湖の中央に浮かぶ島を、人は梁山泊^{りょうざんひつ}と呼ぶ。梁山泊には賊が大量に逃げ込

んでおり、国が攻めようとしても、籠城戦に持ちこたえてしまう。

ついでにその賊が梁山湖の漁を制限しているので、村人は困っていると聞いた。

「その賊をどうにかして追っ払えないでしょうか……？」

「地方の軍であれ首都の禁軍であれ、今の軍では不可能です。陸軍に力を入れていたため、水軍の装備も訓練も皆無^{かいむ}。もともと葉仙国は大陸の一部ですからね。水軍を育てる意味もない。禁軍に関して述べる とすれば、地上戦すら覚束^{おぼつか}ない隊まである」

進さんの断定に少し怯んだ俺だが、むしろ頭が冷えて、冷静な判断ができるようになってきた。

そういえば、父が帝を守る禁軍から外され地方に飛ばされたとき、そんな話を言っていた。

禁軍はもう駄目だと。

同時に、疑問も沸いてくる。

何故進さんがそれを知っているのか？

「……禁軍と言えば」

俺は少し、危険をおかして尋ねた。下手をすれば、うちの家系がバレル。

「童貫元帥と高球將軍でしたか。軍のトップで賄賂^{わいろ}を握りまくっているそうですね？」

「元帥は賄賂など受け取っていないようです。その代わり、元帥直属の軍を精強にするため、大量の軍資金をそのたった一万の兵につき込んでいると聞きます」

ちなみに兵の数は禁軍全体で二十万人、地方はもつと多い。

俺が聞いたこともない、恐らく情報漏洩ろうえいを気にして親父が言わなかった情報が進さんの口から語られていく。

「……職権濫用ですね」

「高球將軍に比べたら、まだましでしょう」

涼しい顔で話してくれるが、本当にいいのか進さんよ。捕まるんじゃないのか。

そこまで俺は考えて、ふと思いついた。

だから、逃げているとか？

「どういう意味です？」

「今の禁軍の席次はあの男の意のままです。上部にいるのは、將軍に賄賂を贈り、そして一従順で、名家の子弟である者ばかり。彼らは半年禁軍師範の元で鍛えられ、残りの半年で実戦に出されます。そして直ぐに財務関係の仕事に移って私腹しふくを肥やしていくのです」

進さんが露骨に悔しそうな表情を浮かべている。そりゃ誰だって悔しいよな。

「帝に今の横暴をお告げになられたことは、おありですか？」

「帝に葉仙の現状を報告するのは、高球將軍です」

だから帝の元に、禁軍の腐敗は届かない。

「最低ですね。外国から攻められたら直ぐに潰されそう」

進さんの口元に、やっと笑みが戻った。

「そうならないのは、地方にいる將軍達のお陰なのですよ。呼延灼こえんしゃく將軍然り、関勝將軍然り、浅倉將軍然り。そういった將軍達が国の境にある府に着任されていることで、外部からの攻撃に堪えているようなものですから」

「……………」

「どうされましたか？」

正直、まさかここで親父の名前が出るとは思わなかった。家ではぐーたらな親父でも外面はいいんだな。

そつえば、親父が国の境に行かされたとき大規模な戦争があつ

た。敵国は追っ払ったらしいけど。首都に呼ばれたということは、また親父は国境に飛ばされるのかもしれない。無茶をしなければいいんだが。

「……いえ」

そこでふと、親父が口に使っていた人物の名前を尋ねてみた。

「呂栄將軍りよえいというかたも、たいへんお強いと聞いたことがあります」

不意に、進さんの表情が強張った。

「……失言でしたか」

「……呂栄將軍ですが」

進さんは強張った表情を直さないまま、いつも以上に底の読めない声で告げる。

「数日前、謀反むほんの疑いで高球將軍に捕らえられています」

「……そんな」

親父に連行されて、何度か会ったことがある人で。底抜けに明るくて、国と帝を第一に考えるような人で。

そんな彼が。

俺は立ち上がり、進さんに詰め寄った。

「何かの間違いでしょう!？」

「高球將軍の謀だろうと、皆噂しております。その謀反に連座して、都でも数人が捕まるという筋書きだそうです」

取り乱した俺を、進さんが冷静に、しかし苦しそうに見ている。

その視線で、一気に頭が冷えた。とりあえず、畳に座る。

「都では誰が捕まりましたか？」

進さんは答えない。いや、答えられないのか。

自分は捕縛の前に逃げたから。

「……まさか、進さんが!？」

「本気で逮捕するつもりだったのかは、分かりません。ですが、それに近いことを匂わせるように言われました。誓って私は謀反など

やっていない。よって捕縛されようともいずれ釈放される。そう思
って何もせずにいたのですが、友人が別件で駆け付けてくれました。
その時に早く逃げると。母も捕らえるという噂が流れましたから」

認めた進さんは高球に嫌われるようなことでもしたんだろうか。

何にせよ、都って怖いところだ。良かったな親父、地方に行けて

「なので、禁軍の中で誰か捕まったのか、分かりません。友人が私
を逃がしたことで捕まっていないと良いのですが……」

「話を変えて済みません。謀反の刑はどれほど重いのですか？」

「引き回しの上死刑、ですね」

「では、呂栄將軍は……」

俯いた俺の肩を、進さんが慰めるように叩いた。

「執行までに数ヶ月の猶予があります。その間に役人が罪人の無罪
を確信し放免、といった事例もあるようですから」

「はい。……ありがとうございます」

いえいえ、とにつこり笑った進さんは、母の様子を見てくると言
って、部屋をあとにした。

Military (後書き)

お久しぶりです。

明けましておめでとうございます。

今年もよろしく願いします。

そろそろもう一つ。

奇譚の元ネタは中国四大奇書の一つです。

でも内容は大体変えています。原型残ってんの数人の名前だけ……です。あと地名とか。

D e f e a t (前書き)

D e f e a t ∴ 敗北

Defeat

悔しい。恥ずかしい。

俺はそんな気持ちでいっぱいのまま、修の屋敷の一部屋に閉じ籠もっていた。

「私に負けて、悔しいのか？」

不意に襖が開き、そこにさっきのおっさんが立っていた。気配を感じなかった。

何でここにいるって分かったのか尋ねたかったが、それより答えるべきことがあった。

「……はい」

おっさんは僅かに溜め息を漏らし、俺のそばに屈み込み俺に手を伸ばす。

ぐいと、目の下、頬の上辺りを手でこすられた。

「泣くほど悔しかったか？」

「違う」

爛々と輝く眼に、何もかも見透かされている気がする。だから、俺は楽に話し出せたのかもしれない。

「ずっと、最強だと思ってきて。それで、あんたに負けて、ちっばけだったのに威張りくさってた自分が情けなく思えてきた」

「自覚できたならばそれで良いだろう」

「待ってくれ」

立ち上がったおっさんの袖を、俺はとっさに掴んだ。

「もっと強くなりてえんだ。いや、なりたいのです。だから、棒術を教えてください！」

おっさんは黙り込んだまま、俺を見て何も言わない。

「……何故、強くなりたい？」

「強くなりたいと思って、悪いのですか？」

それが男つてもんじゃないのか。

私は、自分を真つ直ぐ見詰める青年と対して気後れしていると自分でも分かっている。

父が先代の武術師範だったために、武術に関しては真つ直ぐに、それこそ、この青年のように強くなりたいという気持ちと共に力をつけた。

しかし、その結果がこれだ。

あまりに武術にのめり込み過ぎたせいで、危うく母を道連れに死ぬしか道を残されず逃げている馬鹿者なのだ、私は。

この青年も大切なものを見失わないだろうか。そう心配するとともに、真つ直ぐな瞳に心が疼いた。

この青年になら、私の武術を余すことなく全て伝えられるのではないか。否、類まれ(たぐ)い一稀な才能に恵まれたのか、体格も武術に向いている。私よりも強くなるのではないか。

結局、青年の将来よりも自分の武術が勝った。

「名は？ 修殿が話していたのは聞いたが、お前からは聞いていない」

「萩原龍といいます」

「では龍」

どこかに、自分の生きた証を伝えられないか。そう思って生きたのは、間違いではなかったのかもしれない。

「険しいぞ。死んだ方が楽だと、何度思つか分らん」

「耐え抜きます」

父がどこかで笑った気がした。

そしてこの出会いが、龍の運命を変える決定的なものとなる。そのことを、本人達はまだ知らない。

「あー、戴宗^{たいそう}か？ 彼だが、どうやら龍という青年^{りんちゆう}を教えるらしい。
だからもう少し観ていくことにするんでな、林冲^{りんちゆう}に伝えてくれ」
知るのは、立ち会いを遠くから見ていた、牡丹^{ぼたん}の彼だけ。

s i d e : H e i s c a l l e d & q u o t . 花和尚 . & q u o t ; (前

s i d e : H e i s c a l l e d ” 花和尚 . ”

: 彼は花和尚と呼ばれている

連日に及ぶ査問に、林冲は溜め息をついていた。そばにいた師範仲間と雑談ついでに査問の内容を確認し合う。

林冲は首都を護る禁軍きんぐんで、槍術の師範をやっている。

数日前、呂栄將軍の捕縛に連座して、皆が進さんと慕う彼が捕縛に狙われた。林冲は酒場で情報を集めていた最中その話を聞き、慌てて彼を逃がした。

彼は捕まっではいけない人間だ。

そして接点が多かった師範達が政府の上の役人達に個別で呼び出され、彼を逃がした者に、また、彼が逃げた方向に心当たりはないかと尋ねられている。林冲も呼び出されたが知らないの一点張り、逃げた方向については延安府と正反対の方角である南がどうか言っておいた。だが、信用されていないだろう。南は呂栄將軍の捕縛があつたばかりだ。

腕は強いが頭はあまりよろしくない師範。それを林冲は演じていた。誰に言われたのでもない、自分で選択した。

その方が、禁軍の内部を探るのにもってこいだからだ。

師範の仕事を終えて私営の食堂で食べていると、隣に男性が座つた。

「久し振りだな、林冲りんちゅう」

「元気そうで何よりだ、戴宗たいそう」

男性の名は戴宗。最南端、江州の牢役人を任されている。そして飛脚屋ひきやくやを営んでいる。飛脚屋と言うのは、手紙を早く届ける職業だ。そしてその飛脚屋を隠れ蓑として、林冲らの連絡網強化に一役買っている。

ちなみに戴宗の眼は大抵牢の地下にいるからか、どんよりと曇くもっ

ている。たいていの人間は見た瞬間病気と思うのだが、長年のつきあいで慣れた林冲は元氣の一言で片付けた。

戴宗は酒と肉を注文して、林冲の酒を勝手につまむ。

「人のものを奪^とるな」

「後で俺のものをやる」

そう言われては文句も言えない。

しばらく黙って食事してから、周りの人間の数が多く、しかし混んではない状況になったのち、戴宗が口を開いた。

「進殿だが、どうやら湖月村で滞在しているらしい」

「意外と近いな。延安府にはまだ着いていないのか」

「母者の具合が良くないようだの時遷^{じせん}が言っていた」

時遷というのは、林冲達の仲間で間者を生業にしている男だ。普段は闇にいる。気配を悟らせることもなく、いつも突然現れる。武術や気配に長けた進でも察知できるか分からない。

「それから、だ。どうやらその一帯で名を馳せていた龍という青年と立ち会い負かしたと。花和尚からの報告だ。青年は彼に稽古を頼んだらしい」

「もし承けたらその龍という青年、かなりの強者になるぞ」

「だから、花和尚^{かおしょう}が彼を観ている」

「こちらに引き入れるつもりか？」

花和尚と呼ばれる彼は、あだ名の通り背中に牡丹の入れ墨がある坊主だ。破戒僧で、酒は飲み、肉も食う。ついでに暴れる。しかし純粋なせい、慕う人間は多い。何故か、主に賊徒だったが。

彼は、林冲が会ったときにはもう坊主であつた。今も坊主であり、この宋全土を行脚している。

行脚する中で、反乱や国の有^あり一様を考える人間と知り合い、人と人との縁を結ぶ。それが、魯智深が今やっていることだった。そして知り合った同志が新たな仲間を作る、といった現象も起きている。

「進殿より青年の方が使えるかもしれん、と考えていた」

「……確かに、あの人は純粹に武術にのめり込んでいたからな」

彼は今、隱密に指名手配を受けていた。首都で暴れたのが政府の耳に入つたのかと思つたが、どうやら違ふらしい。

賊の幾つかを統轄していると、掴まれたのかもしれない。林冲もさりげなく彼について尋ねられた。なので戴宗を通じて首都に来るなと彼には警告してある。

「ま、それぐらいだな、主な話は。あとは大したことないが……」

林冲が嫌な予感を感じると同時に、戴宗はにやーと意地の悪い笑みを浮かべた。

「かなりの愛妻家のようだな、林冲？」

「黙れ」

「飛脚屋に來た兵士達が雑談していてなあ。昼食に愛妻弁当をいそいそと持ち出し、しかもそれを見て満面の笑みだと？」

「いいから黙れ」

「しかもそれを幸せそうにぱくついていると？」

「お前」

「奥方も綺麗になつてきたらしいな？」

林冲が黙り込み、につこり笑うと、戴宗の表情は凍りついた。

「どこを突かれて死にたい？ 十秒待つてやろう」

「いや、少し待」

「十」

「いやだから、俺は」

「九」

「済まなかった」

「もう遅い。八」

「次からは氣を付ける」

「嘘つけ。七」

「人殺しをしたら奥方が」

「ブツ殺すぞ。六」

「花和尚もだ、悲し」

「納得するだろうな。五」

「単細胞」

ぴたりと、林沖は秒読みを止める。

槍を左手に、右手は戴宗の胸ぐらに。

「ほう？ 牢役人で飛脚屋の戴宗殿は寿命を縮めたいらしい」

「あんな。会話のどこに怒る要素があった？ ただお前のところは仲良しだなと言いたかったただけだぞ」

「俺はからかわれるのが嫌いだ」

「本当のことだろう。禁軍一仲睦まじいとよく聞くぞ」

「何だそれは」

林沖が興味をそそられて聞くと、戴宗は胸を張って答えた。

「ちなみにお前は葉仙軍愛妻家順位第三位だ！ 飛脚屋をやっているとこういった話も飛び込んでくる」

「本当に何だその序列は！？」

「ちなみに一位は相も変わらず浅倉將軍！ 奥方が亡くなっても不動の一位を保ち続けているぞ！」

「いやそれは流石だと思うが！ 少し待て、二位は一体何処だ！？」

「ふはははは聞いて驚くな！ 呂栄將軍だッ！」

「なるほど、あの夫婦は仲睦まじいな！」

思わず同意してから、ふと思い出す。

「……將軍の奥方は？」

戴宗の笑みが、余裕が、消えた。

「忘れたか林沖？ 真偽に関係なく、謀反で捕縛された場合は一家で死刑だ」

呂栄將軍には、妻と五歳になる息子がいた。彼らも刑にされるのか。

そこまで考えたところで、戴宗が但しと付け加えた。

「奥方の機転で、息子だけは部下の一人と共に逃げているのだという」

思わず、安堵の息を吐く。

不意に視線を感じて戴宗を見ると、彼は厳しい表情を浮かべていた。

「林冲」

「何だ」

「もし我々が行動を起こすことになったら、真っ先に奥方を首都から逃がせ。いいな？」

行動、つまり、反乱。

国を相手に喧嘩を売る行為。

林冲は迷いなく頷いた。

何も出来ない自分が齒痒い。ただ、禁軍の中で反乱に向きそうな人物を洗い出し仲間に報告するしかできない自分が悔しい。

戦いたい。両親を殺した、宋という国と。

s i d e : H e i s c a l l e d & q u o t ・花和尚・ & q u o t ; (後

和訳、多分これで合っている…はず……！

T r a i n i n g (前書き)

t r a i n i n g 訓練

Training

朝。

俺はこつそり、屋敷から馬小屋に通じる道の影に隠れていた。棒を構え直す。

進先生は縁側で修と話している。時折笑い声も聞こえてくる。ちくしょう羨ましいなオイ。

会話に加わりたい気持ちを我慢して何故俺がこんなところに潜んでいるかというと、

「進先生！ 覚悟おっ！」

これも訓練で、俺は飛び出して先生の頭に棒を降り下ろそうとして、

「胴がから空きだ、未熟者」

「ぐえっ！」

腹を突かれた。

強さには限りがない。俺はしみじみとそう思いながら走っていた。さつき言われた言葉を思い出す。

「私は今から昼食を頂く。お前は抜き。私が食べ終わるまでに屋敷を十周して戻って来るように」

進先生は鬼だ。ケンゼンな男子から食抜くなんて、マジで死ぬつての。しかも先生食うの早えーから、本気で走らなかつたら十周なんてムリだ。

ということで、只今俺、突かれた腹の痛みを我慢して全力疾走中だったりする。

進先生が来て早半月。俺は本当に自身が強くなったのか、それすらも分からないまま、死ぬ気で稽古に励んでいる。だって先生しか相手いねーし、先生は相変わらず強いし。

先生と打ち合っていると、息が苦しくなつて、視界が狭くなつて、もう体が一步も動かないんじゃないか、そこまで落ちる。でも身体は不思議と動いていて、ある一線を境にまた普段と同じ、いや、それ以上身体が動くようになる。

しかも、俺はてつきり一日のうちの数刻教えてくださるんだと思つてたが、丸々一日だった。夜中もいきなり奇襲を受けたりする。で、半殺しにされる。

しかも復讐とばかりに打ちかかって先生は見切る。そして一撃で確実に仕留める。

「あー悔しー！」

進先生に負かされる度、今までの實力……というか強さは何だった、と虚しくなる。

一時期は先生に殺意まで持つてた。でも、先生と打ち合いをするうちにいつの間にか消えていた。

蹄ひづめの音がして、隣に俺の馬が並ぶ。昔は繋いでいたんだが、この頃縄を外してやると、こうやって俺と一緒に走るようになった。

馬上で打ち合いをしているとき、馬が思う通りに動かない時がある。むしろその方が多い。それに対して進先生の馬は手綱無しでも先生の思う通りに動いている。

どうやったらそうなるんだろう。そう思いながら、俺は近頃、馬の掃除を自分でするようになっていた。効果はあまり無い。

だがこの頃、走っていると馬は俺に合わせてくれる。

「戻りました！」

修の屋敷に戻ると、進先生が凄く眠たそうな顔をして俺を見た。

「遅い」

「はい」

棒を受け取り、数刻打ち合いを続ける。空が赤くなつたところに打ち合いを終えて、進先生のお母様とお話をする。

母様は何でも知っている。毎日話す内容は違つが、その中に必ず、教訓や字、歴史、数などの知識が混ざっている。

前に修が冗談で言った質問に答えたら、あいつは本気で驚いていた。でも母様が教えてくれたんだぜ！

修もそれを聞いて、時折母様の所に勉強を習いに足を向ける。

修は昔から、役人になることが夢だった。修の家、浅倉は軍人の家系なのだという。しかしあいつは生まれつき体が弱く、軍人にはとうていなれない。だから、別の面から国を助けるのだと、昔言っていた。今も独学だが勉強を続けている。母様は、あいつにとってもいい師せんせいなんだろう。

そして今日、俺が母様の部屋を訪れたら、母様はとても難しい顔をしておられた。

「龍」

初めは萩原殿だったが、俺が頼んで名前呼びにしてもらった。

「はい」

「修殿は、役人になりたいのですか？」

「そう、本人から聞いたことがあります」

母様は眉を潜める。

「修殿は、女人にょにんですね？」

「はい」

何か困ったことがあるのだろうか。勉強用具を探しながらそうぼんやり考えていた俺に、母様は思い切って告げた。

「女人は、役人登用試験……科挙を受けられません」

俺の手が止まる。

母様は尚なおも何かを告げようとして、

「若旦那……違う、名代様みよくだいはおられるか！」

大声に飛び上がった。襖ふすまを開けて外に出ると、同じく修が出て、馬に乗った声の主を見ている。

声を出したおっさんは確か、修の親父さんについてった家人だ。ちなみに若旦那も名代も修のことを指す。若旦那のほうはややざっ

くばらんな感じ。

「いるぞ」

「もうすぐ、御屋形様おやかたさまが戻ってこられます。先に連絡に参りました。告げます、御屋形様は最南端、江州こうしゅうに飛ばされました！」

「だろうな」

俺の驚きをよそに、修が頷いている。

あいつに、そばで棒を振っていた進先生が怪訝な顔で歩み寄った。

「修殿、飛ばされたとは」

「ああ、それは」

蹄の音がして、そちらを見た進先生は表情を消した。俺も修もそちらを見て、声を挙げる。

「親父！」

「親父さん！」

しかし、修の親父さんは俺達を見ず、進先生を凝視していた。

まさか、と呟く。さながら、幽霊でも見るかのように。

親父さんは馬から降り、腰にあった剣を遠くに投げる。修が目丸くする。進先生もそれを見て、棒を遠くに投げた。

そして先生は苦笑された。

「どこかで見た顔だと思いましたが、成る程貴方のご息女でしたか」
その言葉に親父さんは笑顔になり、進先生に駆け寄った。

「お久し振りです！ 息災で何より！ 逃げたと聞いたときは驚きましたぞ、王師範！」

師範。その言葉に俺も修も、先生を見る。先生はややあつて、呟いた。

「話しましょう」

T r a i n i n g (後書き)

遅くなつて済みません：

ですがまた投稿が空くかもです：

R a g e (前書き)

r a g e ∴ 激怒する

進先生、改め王進先生は。

先生は、禁軍の総師範だった。親父さんも一時期鍛えてもらったらしい。

「誰も王師範には敵わんよ」

親父さんはそう言って笑い、腰を上げて母様のもとに行った。

あとに残された俺と修は、進先生をじつと見る。

俺も色々聞きたいことがあったが、修が口を開いた。

「師範だったのですか。一体何があつて？」

進先生は躊躇いなく、全てを話してくださった。

「禁軍の質を上げる旨の上申書^{むね}を提出しましたら、高球の怒りを買いました。そして逆賊に仕立てられ捕縛されかけました。林冲がいなければどうなっていたことが」

林冲という方は、師範仲間なのだという。主に槍を扱う方で、とても強い。

「私は別に捕縛されようとも良かった。無実の罪ですから、いずれ解放されるでしょうし。だが捕縛された場合、母まで捕らえられてしまう。母が牢屋に繋がれるのは耐え難く思ひまして、逃げました」
「その判断に間違いはありませんでしたよ」

親父さんが帰ってきて、進先生の向かいにどっかりと座った。

「高球^{こうきゅう}^{うい}^ご^{めい}^し^ん^だ、蔡京^{さいけい}の下^{した}についとる雨宮^{あまみや}^う^み^や^と^いい！ 無実の罪をでっち上げて牢屋にぶち込む数の多いことか！ 修、王師範から聞いたかもしれないがな、呂栄^{りやう}將軍も無実の罪で捕縛された！ 奴らは死罪で押し通すつもりだ！ そして連座して、同じように禁軍の質を高めんとしていた王師範も捕縛するつもりだった！」

俺は、高球も蔡京も雨宮も呂栄も知らねえ。ただ、呂栄と言う人が謂れの無い罪で捕縛されてしまったというのは分かった。進

先生も狙われたのだと。

「今の禁軍は腐つとる！ 質を高めようとして何が悪い！ 自分が落とされると分かっているから上申書を取り下げさせようとしたんだろぅが！ そのまま腐つて崩れてしまえ、高球！」

進先生も渋い顔で頷いている。

失礼ですが、と俺は手を上げた。

「その高球つつー人はお偉いさんですか？」

「悲しいことにな！」

「帝に蹴毬けまりの腕で見初められて大將軍だ」

「うわー、と修が呟いている。母様から習ったが、大將軍は將軍を纏める、軍部の大将のことだ。蹴鞠けまりというのは字の通り毬を蹴る貴族の遊びで、前に外国に足を伸ばしたら、サッカーという名前で呼ばれていた。」

「もし龍、お前が軍を仕切つて奴と戦つてみる。絶対勝てる。用兵も最悪だからな、高球は」

親父さんに断言された。

「じゃー今、首都つて襲撃されたら……」

「いや、まだ潰せないな。林師範がいる」

親父さんはそう言ったが、進先生はいやと顔を改め呟く。

「林沖は護ろうとしないでしょう。それよりあちらだ……雨宮。あれがいる限り、権力は続きます」

「そのような男ですか？」

「あれの背後に、何百人もの忍がいます」

忍。忍者。

そんなものが存在するなど。

そう思った俺を、進先生は見据えた。

「龍、あり得ないと思うか。私は見たのだ。気配を消し、草むらを風を立てず音もなく駆け、闇に混じる男達を。正規の兵ではない。だが、あれらは間違はなく帝を護るために在る」

ぞわ、と産毛が逆立った。

「そんな兵が、あるのですか」
「ある」

そう言って、目を閉じる。

「何にしろ、私は反逆者ではない。もう争い事に関わる気は無い。
余生は山で静かに暮らします」

もったい
「勿体無い！」

親父さんが怒った。

「いえ。私はもう必要ありません」
龍、と先生に呼ばれた。

「はい」

進先生は、外を眺める。

「少華山から、気が立ち昇っている。夜、恐らくこの村に襲撃があるだろう。お前一人で打ち倒せ」

「進殿！？」

「王師範！？」

修と親父さんが仰天したのも仕方ない。言われた俺だって驚いている。

少華山というのは、この湖月村のすぐそばにある山で、大勢の賊が潜んでいる。さらに、とても強い。前食糧を狙って襲ってきたときも、かなりの犠牲を払い村の衆でやっと追い出した。

「俺には無理です」

「出来る」

言い切った進先生は襖を見て、

おやかた
「御屋形様！ 少華山の連中が！」

声に、俺を見た。

「出来る。馬を持っていけ」

「——っ」

ああ、どうにでもなりやがれ！

「――俺が玉砕したら、あとはお願いしますよ先生！」

「ああ」

進先生が笑ったのを見て、俺は棒を引っ付かんで屋敷を出た。屋敷を出ると、当たり前のように俺の馬が待っていて、背中に乗ると手綱も無しにトコトコと歩き出す。

歩いた先は、村の外れだった。

先に、賊十人程が集まっていた。奴らは俺を見て、カラカラと嘲笑った。全員、馬に乗っている。

「久し振りなんじゃね？　ずーっと女の屋敷に引き隠って！」

「名前負けしてるよなー！」

「龍の字が泣いてるぜえー？」

「今なら一人でも倒せるだろ！」

それらの声を、俺は集中して閉め出した。

賊はそんな俺が気に入らなかつたらしい。

「そっぴやその女、幼馴染みなんだって？」

耳に入った幼馴染みという、単語。

「さぞかし美形なんだろうな」

「こいつ殺して連れて帰ろーぜ！」

「おっ、いいね！」

「酒盛りの酌やらせたりなー！」

――怒りで、全身の血が煮えたぎった。

こいつら全員、ブツ殺す。

賊が一斉に襲いかかってくる。

しかし俺には、人形がゆっくり歩いているようにしか見えなかった。

瞬時に二人を打ち倒す。それを見た三人が鎌を振り上げて、

「――ああ、そうか」

進先生には、俺がこう見えてたのか。

「手前ら全員、胴がガラ空きだぜ」

胴を薙ぎ払って、吹っ飛ばす。

まるで、ぎこちなく歩く案山子でも相手にしている気分だ。遅くてノロくてトロい。

そして、馬が思う通りに、動いてくれる。両手で棒が扱える。それがどんなに有り難くて嬉しいことか。

すれ違いざまに三人叩き落とした。振り返り、跳ね上げるようにして、また三人。

「――あと四人」

R a g e (後書き)

お久し振りです。レポートという名の現実から逃げている蝶さ崎です。

やっと書き出せました。こっちもあまり空けないように精進します

R e g r e t (前書き)

r e g r e t後悔

Regret

俺と親父、進さんが駆けつけたときにはもう、龍は十人を倒していた。

それも、軽々と。前はあんなに苦労したのに。

「凄い……！」

俺の声に、龍がゆらりとこちらを見た。俺は、その眼に。

冥い、奈落の底を映すような目に、ぞっとした。

「……龍！」

龍がぎよつと目を丸くする。あの怖い目が消える。それと同時に、のこり四人が龍に襲いかかった。それに気付いたあいつは棒を構え直す。

あつと言う間に、十四人全員が地面に突っ伏していた。龍は馬から降り、

「手前か」

男の一人の髪をわしずかみにして引つ張り上げた。

「今度修について何か言ってみる。そのときは本当にブツ殺す」

俺？ 賊が何か悪口でも言ったのか？

龍が手を離すと、賊は逃げ出した。

龍は何やら考えていたようだが、馬があいつの背中を押す。

進さんの前に立った龍は、思い切って顔を上げた。

「進先生。賊が案山子に見えました」

「初めの頃のお前もそう見えていた」

進さんは柔らかく笑った。

「強くなつたな、龍」

「でも！」

龍が泣き出した。

「馬が……馬が！ 馬が、好き勝手動いてたのに、思う通りに動い

て！」

「馬が、お前を主と認めたのだろう」

はい、と涙を拭わないまま頷く。

それを見ていた進さんは目を一度閉じ、開けると、親父を見た。

「我々は明朝、ここを出ます」

「進先生！？」

「龍」

進さんは棒を見つめ、首を振る。

「私は伝えられるものは全て伝えた。いつ出立を告げようか迷っていたが、今の戦いで気持ちの整理がついた。それだけだ」

「でも！」

「ここからは、自分にしか分からない。私が教えられるものはない。居ても意味が無い」

龍は駄々をこねる子供のようだったが、やがて消沈した顔で頷いた。

屋敷に帰ってから、親父は酒盛りに進さんを付き合わせた。二人は俺や龍を入れずに何かを話しているようだった。

そのあいだ、ずっと龍はしゃっくりをあげるようにして泣いていた。

「龍」

「だって、だってよ……！ もっと教われると思ってたんだぜ！
なのに！」

「龍！」

俺があいつの頬を手で押すと、龍は俺を見る。

「元々、御母堂の様子が良くなったら出ていくつもりだったんだ。それが少し、お前に教えていたことで滞在期間が長くなった。それだけだ。泣くな」

頭を撫でてやると、こいつはこくりと頷き、昔のように俺の腕に額を押し付けた。

それは、気が昂ったときの、あいつの癖。

「……龍？」

「少華山の賊が、修を連れていくつて言つて。俺、修の声を聞くまで、本気で奴らを殺すつもりだった」

俺、と龍はまた泣き出す。

「俺は人を殺そうとした」

「龍」

俺は龍を抱え込み、胸にあいつの顔を押し付けた。胸は無いが我慢しやがれ。

「とりあえず、落ち着け」

不安定なところに進さんの出立宣言を聞いて、心細くなっているだけだ。

背中を撫でていると、いつの間にか龍は泣き疲れて眠っていた。

わんわんと泣く声は、浅倉父と王進にも聞こえていた。

「泣いておりますな」

「師範と離れるのが辛いからでしょう。どうですか、もう少し滞在して行つては？」

それは、と王進が苦笑を漏らす。

「滞在を引き延ばしにするほど、別れは辛くなりますから」

否定も肯定もせず、浅倉父は黙って酒を煽った。王進にも勧める。

「ありがとうございます」

「固くならんで下さい。今は將軍にまでなりましたがね、昔みたいにワイコラ腹割つて話がしたいんですよ」

浅倉父がふんぞり返り、王進が喉を鳴らして笑った。

「全く……本当に、何故お前のような男から修殿のような女人が出来たのか、不思議で堪らん」

「妻の教育の賜物ですな！」

「即答できる所が流石だ」

浅倉父が豪快に笑う。王進は楽しそうに、三日月を見て酒を飲む。ひとしきり笑ったのち、浅倉父は静かに問うた。

「龍は、棒をどれほど使えるようになりましたか？」

「お前に負けず劣らず」

彼が目を開く。だが、と王進は彼の動揺をよそに龍を否定した。

「あれは、禁軍には入れぬ方がよい。確実にあぶれて、腐らされる地方の方がまだよい。だが、出身地を確認されて、お前への当て付けのように高球の手元に置かれるだけだ。入れるな」

「なら、どうすれば！」

「軍に入れようとするな。あれの思う通りにさせる」
成すがままに。

「あれには、私の武術の全てを伝えた。ただ、そのせいで私のような武術だけの人間にならないかが心配だが。しかし、あれは軍には収まらぬ。旅をさせる。様々な人間を見せる。その結果あれがどの道を選ぼうと、妨げるな」

例え、賊徒になろうとも。

溢した王進は、不意に庭に顔を向ける。

そこに立っていたのは、坊主。

「私がこの村にいることを、どこで知られましたかな？」

王進は立ち上がった浅倉父を腕で制し、彼に話しかける。

「噂で聞きました。貴方が若い者に死、すれすれに武術を教え込んでいると」

王進の眼が、爛々と光った。

「あれに、手出しは無用。自分の道は自分で決めるでしょう」

「でしょうな。ですからその結果我らの元に来て、王進殿は恨まないでいただきたい」

「我ら、だと」

浅倉父が剣を抜く。

「貴様、何者だ。返答次第では斬る」

坊主は肩を竦めた。

「ただの人間だ。国の内情を憂う、そして現状を打開せんと動く、ただの人間だ」

「どうやって変えると言うのだ。高球らがいる、この腐った国を」
くつ、と坊主が唇の端を上げて笑った。

「何故、変えようと思う？」

「なに」

「腐った国は、そのまま崩れて滅んでしまえ。違つか？」

明確な、国家を否定する言葉。

浅倉父の目が、憤怒に燃え上がった。

「斬る」

「斬れば良い。だが、それで何人の子供が救われる？ 何人の農民が、家の無い人間が救われる？ 俺一人が死ぬことで何人もの人間が救われるのであれば、俺は喜んでこの身を裂こう。では聞くぞ、浅倉將軍。そうなのか？」

「黙れ！」

「黙っていても死人と同じではないか。それとも何だ、軍人は上部の命令だけ聞いていれば良いと、本気でそう思っているのか？」

浅倉父が詰まる。それを見た坊主は、本当に忌々しそうに彼を睨んだ。

「俺の父は、金を扱う仕事をしていた。ある日、役人の横領の責任をなすり付けられ、引っ立てられていった。軍人は、腐った役人の命令に従い、親父を連れていった。母はその後、嘆き悲しみ死んだ。軍人として役人と同じ、腐っているではないか！」

痛烈な非難に、浅倉父は俯く。だが、坊主は非難を止めない。

「俺のような子供が、何と多いことか！ 俺はまだ良い、坊主に拾われたのだからな。だが、運悪く誰にも助けてもらえなかった子供はどうなる。野垂れ死ぬしかあるまい。そうか、人の物を奪って生

きる、けだものにしか成れぬだろう！」

王進も、辛い。浅倉父も、辛い。

「お前達はただ、やれ高球がどうだの蔡京がどうだのと不満を述べているだけだ！ そのようなもので死んだ子供達が救われると思うか！」

坊主は闇夜に消えた。

「俺はもう、そのような子供が居ない国を目指している。それに異議を唱えるなど、お前達にはその権利すら無い」

明確に否定された彼らは、ただ、俯くことしかできなかった。

Regret (後書き)

一ヶ月近くお待たせしました、ダイです。

データを間違えて別のところに保存しており、探すのに手間取っておりまして。

次はまた遅くなります…済みません

Hurry (前書き)

hurry.....急ぐ

H u r r y

進先生に、旅立たれる前に忠告されていた。

「目に見えることだけが全てではない。同じように、目の前の人間が語ることだけが全てではない。目を見る、人を見る」

それは、目の前にいる坊主に当てはまるのだろう。

「俺は喜多^{きたかなめ}要と言う！ 剃髪しているのを見れば分かると思うが、坊主だ。趣味は博打、得意なものは酒の飲み比べと早食い競争かな」
「がははと豪快に笑った喜多は、またご飯をかき込む。いや、坊主は酒飲んだら駄目じゃなかったっけ？」

このおっさん、進先生たちが行った次の日の今日、修の屋敷前で倒れていた。優しい修が喜多を放っておけるわけもなく、こうやって屋敷に招いている。

「いやーこの家の前で行き倒れて正解だったな！ 美人な二人組に会えた上に、こんな上手いご馳走を食べさせてくれて！ おっと、飯おかわり！」

「……こんなやつ。何で捨てなかったんだよ？」

駄目だとは思ってたけどな。どうしても、俺は修が関わってくると我が儘になっちまう。こうやって利用されると尚更。

そのまま呟くと、修は困ったように首を傾げた。

「だって、な。何かの縁だろ」

「どっか捨てに行こうぜ」

俺の言葉に喜多はくりくりとやけに純粋な目を輝かせて笑った。
「お邪魔だったかな？」

いきなり修が顔を赤くし、頬をひきつらせる。

「ばっ………違………っ、違います！」

「何が邪魔なんだ？」

喜多が笑い転げたが、気に食わない。

「お前ん家の庭、借りるぜ」

俺が修にそう告げると、修はにっと笑って送り出した。

俺が少華山の賊数人を追い返したとき、修達と同じように物陰から村人が見ていた。彼らが、俺に武術を教えてくれないかと頼んで来たんだ。

俺はまだまだ成長する気でいたし、進先生から、あとは自分との戦いだ、とも言われていた。それに俺に教えることなんか無理、つかおこがましいとすら思っていた。だから拒否するつもりだったけど、村人に押しきられた。

「健康な体があるのに、何で陰で震えて見てなきゃならねえ……だったかな」

ちよつと感心して、だから自分が教えられるところまで少しでも教えられたら、と思ってしまう。

今日は栄えある第一回だ。浅倉屋敷の庭を借りて使っている。

村人に言った場所に行くと、初め頼み込んできた人数の倍以上に増えていた。

だが。

「聞け」

進先生が来てから使うようになった鉄棒を地面に振り下ろす。辺りが静かになった。

「俺に教える気など無い。構え方などは教えるが、そこからは自分で見る。見て、良い所を盗め」

村人らが、ざわりと囁いた。とても目障りだ。当たり前だろ、こだけ人数集まったら、一人一人教えるなんて無理じゃねえか。

だが、それは案外良かったようだ。

村人らが団結して事にあたる。分からない事を互いに聞き合い、それでも分からなかったら俺のところに聞きに来る。村人のなかで

も上手い奴にコツを聞いたり、教えてもらったり、その他もろもろ。これだと、調練でもなんでもない。ただの練習会みたいだ。でも、この雰囲気崩したくないと、思った。

龍がワイワイやる声は、こっちにも聞こえていた。

「向こうでは何を？」

喜多さんはご飯を食べる手を止めないまま、俺に尋ねる。

「軽く、龍が村人に武術を教えています」

「務まるのか？ あの青年に」

からかうような口調に少しむっとするが、喜多さんの目は笑っていないかった。

「大丈夫です。あいつは今、とても強いですから」

「そのような意味ではない」

喜多さんは俺の顔を指差し、歌うように問う。

「練習となれば、幾度となくあの男は村人と棒を合わせるだろう。

そのとき、加減ができるか？ 賊相手と村人相手では全く違う。それを、あの男は理解しているのか？」

思わず詰まった。だが、そんな俺を見て喜多さんは苦笑を浮かべる。眼が、和らいだ。

「ま、何とかなるか」

食べ終えた喜多さんは、俺を見つめた。

喜多さんの目は、とても明るい。透き通っていて、とても純粹。

綺麗で、素直な瞳。

初対面ではそんな気などしなかったのに、今は探られているような気になる。

「……何でしょうか？」

「いや。修と龍の関係を図りかねていてな」

「なっ！？」

久々に、頭が熱くなった。

「た、ただの幼馴染みです！」

「それにしても、何やら熟年の夫婦が醸し出す雰囲気とやらを備えている気がするが？」

「ちょ、違っ！　だって、龍は俺のこと男みたいって言うんですよ！」

その言葉に、喜多さんが目を丸くした。

「……女、なのか？」

「ええそうです！　………男に間違えておられましたね？」

「……済まん。俺と言っただろう、てつきり男だと思っていた」

喜多さんが少し恨めしい。だが、この口調を変える気などさらさらしない。

「よく言われます。でも、この口調は変えませんか！　時々私も言いますけれど」

俺の宣言に喜多さんは笑い、それではと首を傾げた。

「嫁の貰い手はあるのか？」

「知りません。親父が何をしたいのかも、全く。………というか今、かなり失礼じゃありませんでした？」

「済まん済まん。では、修は何になりたいのかな？　何を指して日々を生きているのだ？」

俺は胸を張った。

「俺は、役人になりたいのです」

喜多さんから、笑みがこっそり奪われた。

「……何故だ？」

俺にだってその怖い雰囲気は分かる。しかし、なぜ喜多さんがそんなに怒るのか分からない。

ただ、責められているように感じた。

「その、俺の家、ずっと軍人の家系なんです。でも俺は軍人になれないから、役人になって、国をよくして行こうと思って」

喜多さんは、しばらく何も答えない。

ややって開いた彼の口から、とても低い、静かな声が出た。

「先日、呂栄將軍が管理していた青州のある村で、大規模な賊の捕縛作戦が行われた。日頃農作業をする周辺の農民までもを駆り出し、鼠一匹逃さぬ構えでな。管理していた農民が農作業をできなくなつたせいで畑は荒れ、生活も苦しくなる。しかしそうやって縮めた網の中には、何も残つてはおらなんだ。さらにその作戦を掲げた役人らは、己の失態を隠そうと、駆り出していた農民の男達を捕らえ、嘘の証言を吐かせた。呂栄將軍が、賊に手を貸しているとな。そして呂栄將軍を捕縛させ、小さな失敗を大きな嘘でもみ消した」
そんな。

声にならない。頭が殴られたかのように重い。心臓の動悸が激しい。

「捕らえられた農民達は死刑だ。さらに畑は使い物にならん。食物がない、領主に差し出す穀物も無い。大勢の人間が野垂れ死んだ」
指を差される。ゆつくりと、問われる。

「お前には、死んだ彼らに向ける顔があるのか？」
血筋だと。

そのような下らない理由で役人を志しているのだと。

「お前も、彼らと同じ人種にならぬと、言い切れるのか？」

「ふざけんな」

障子が蹴破られた。

立っていたのは、眉を潜めた龍。

「龍」

「修がそんな奴になるわけないだろ」

「何故そう言い切ることができる」

二人が言い合いをする光景を見ると、胸が痛くなる。

「修が修だからだ。村の奴らの間を巡り歩いて、どこか悪いところはないか、改善してほしいところは無いかって聞く。それで少しずつ、湖月村の人は助かつてる」

苦しい。息をするのが、億劫だ。

「りよう」

思わず、袖を掴んだ。龍は俺を見て笑おうとして、俺がおかしいことに気付いた。

でももう、遅い。

「修？ 修！？ しつかりしろ！ 修！！」

俺の指が、袖を抜けた。

「修！？」

意識を失った修が倒れた。喜多が覗き込んでくる。

「そばに医者は」

修の名を呼ぶ俺を引き寄せ、頭に拳を入られた。

「しつかりしろ。今、お前しか勝手が分からん」

頭が、冷える。

「……悪い。隣村に薬師が一人。その人にいつも処方してもらってる。近くに医師はいない」

喜多がうめいた。修が危ない状況なのは俺でも分かる。だが、どうすればいいのか分からない。

最悪の状況だ。

「薬師からもらった薬は残っているのか？」

騒ぎにかけつけた家人に修を寝かせるよう任せ、いつも薬を入れていた場所に向かう。薬は、無い。

喜多が、胸元から錠剤を取り出した。

「昔、知り合いからもらった薬だ。血流が良くなると聞いた。飲ませてやってくれ」

「あんたが飲ませておいてくれ」

俺が屋敷を飛び出すと、馬が待っていた。

「薬師のところに行ってくる！ 頼んだ」

乗ったと同時に馬が駆け出す。

延安府えんあんふのそばに、隻村せきという村がある。その村に、薬師は滞在していた。

「頼む……もっと早く！」

不意に、風が俺と馬を包む。辺りの景色が早い。魔法だか何かかと思っただ、そんなこと今はどうでもいい。魔法に感謝しつつ、飛ばす。

気が付いたら、隻村の入り口に居た。知り合いが駆けってくる。

「龍！ 黒辻くろつじの兄貴が、お前の幽霊が」

「小五！」

俺はそいつの肩を掴んだ。

「せつえい薛永先生はどこだ！？ 修が危ないんだ！」

H u r r y (後書き)

遅くなって済みませんでした！

s i d e : H e i s s t r a n g e f a i r y . (前 書 き)

H e i s s t r a n g e f a i r y .

……彼は奇妙な妖精だ。

Side: He is strange fairy.

王進は無事、子午山に辿り着いていた。村人も好い人たちばかりで、見つかることも無いだろう。

庵を貸してもらったことになったので付近を散策していると、小さな祠を見つけた。別に仏を信じる信じないの問題ではなく、習慣として先ほど母からもらった握り飯のひとつを祠に備える。

そしてまた探索に向かおうと背を向けた、

「——うまい」

その祠から冷やかな声が聞こえた。

振り向くと、長身の男が先ほど供えた握り飯を食べ、祠に座っている。

「誰だ」

気配すら気付かなかった。男は銀色の長い髪を邪魔そうにかきあげながらこちらを見る。眼は栗色だ。

「お前か、握り飯は」

「そうだ」

「うまかった」

「母に伝えておく」

男は頷き、こちらを視たまま目を細めた。

「お前の知り合いで、若い女」

意味が分からない。

「あの世の川を渡っている」
衝撃だった。

「なに」

「若い男が馬を走らせているが、あの速さでは間に合わない」
よっこらせ、と男は立ち上がった。

「うまい飯の礼だ。助けてやる」

その声と共に、男は消えた。

黒辻晁は昼寝をしていた。

夢を視る。七つの流れ星が、家に落ちる夢。それに乗ってきたのは、

「晁っ！」

「……ああ？」

叩き起こされた。目を開けると、眼鏡の彼が腰に手をあてて怒っている。

「何だよ呉用、今綺麗な夢を視て」

「客人が来て、お前が寝ていると知って帰って行っただぞ！」

「あつそう。それで？」

呉用は机に突っ伏した。

その後ろに光が立った。

「……誰だ、そこに居るのは」

光が止むと、立っていた人物に呉用が目を丸くする。

「龍くん！ 一体何の用で」

「呉用、こっち来い。そしてよく見ろ」

呉用を引き寄せ剣を抜く。人物に向ける。

「あのガキはこんな空っぽな眼をしちゃいない」

『よく分かった。ならば話は早い』

謎の男は龍の声で、冷ややかに告げる。

「てめえ、誰だ」

『この者が、村に来る。薬をやれ。早くしなければ、女は死ぬぞ』
そして話を聞かず、問いに答えず男は消えた。

恐らく、女は浅倉修。

彼女が、危ないのか。

「呉用、薛永を呼べ。村の入り口からは、俺の屋敷の方が近い。そ

れと、小五しゅご！」

「はい！」

走っていった呉用と入れ替わりに、ばたばたと子供が駆けってくる。
「村の入り口を見張つとけ。もうすぐ龍のガキが来る。直ぐにこの
屋敷に通せ。薛永がどうたらと言っただろうが、引きずってでもここ
に連れてこい」

「はいはい！」

子供が駆けていく。

晁も薛永の薬作りを手伝ったことがある。

「……俺も探しに行くか」

男は空を歩く。必死に馬を走らせる若者を見る。

「風よ」

ふわりと、風が馬の速度を上げた。

T a l k (前書き)

t a l k 話す

Talk

気が付くと、橋に立っていた。足は勝手に霧の先へと動き続ける。俺は何をしていたんだろうか。脳裏に浮かぶ、泣きそうな顔をした若い男は誰だ。

まあ、どうでもいい。

「良くない」

後ろから、引つ張られた。振り向くと、麗人がいた。青みがかつた銀の長髪に、栗色の瞳。身長はとても高い。

「……知り合いなのか？」

「綺麗だ。向こうに渡るなんて勿体ない」

……そして何故か、話が通じていない。

麗人は俺が歩いてきた橋を指した。

「戻ろう」

「どうして？」

「お前が向こうに行つて、困る人間がいる。僕も嫌だ。おそらくこれが一目惚れというやつだ」

訳の分からんことを言う。龍みたいだ。

龍。

「そうだ、俺」

倒れたはずだ。意識を失ったはずだ。

ここはどこだ。

不意に、麗人に姫様だつこで抱えられた。

「行こう。戻ろう」

ゆっくりと歩く。だが、橋の欄干は目まぐるしく動いている。気がついたら、色とりどりの花畑にいた。

麗人はそつと下ろしてくれる。

「今は、体と魂が重なれない。もう少し待っていてほしい。もうすぐ、薬が君を引き戻してくれるから」

現世に。

「あなたは……」

「自分でも分らない。気が付いたらここに居て、向こうにもこちらにも行き来できるようになっていた」

寂しく笑う姿は儚くて。

「ひとの死を変えることは出来ない。でも、死に関わる人間の運命を変えることはできる。今のよう」

俺は、救われたのか。

「お名前は？」

「名前なんて、ない」

俯いた彼は、勢い良く顔を上げた。

「つけて。名付けて」

「俺が？」

「君が」

いきなりの要望に戸惑って、そして麗人を見つめる。

「公静斗^{こうせいと}」

「僕の名前？」

「公が名字で、静斗が名前」

公子のように仕草が綺麗で、静かだから。

せいと、と呟いた彼は、花が咲くように笑った。

「うん」

やっぱり綺麗だ。

静斗はじゃあ、と俺の顎を持つ。

「君の名前は……」

「俺にはもうあるよ、名前」

眼が少し動く。

「教えて、名前」

「俺の名前は……」
風が、吹き荒れた。

目を開けると、息を切らした龍が俺の手を握っていた。
「龍？」

「ばか野郎！」

龍の眼から涙らしきものが吹き出す。

「何で苦しいって言わなかったんだよ！ いきなりぶっ倒れるんだよ！」

「う、ごめん」

謝ると睨まれる。

「とりあえず落ち着かんか」

喜多さんがお盆にコップを乗せて持ってきた。どうぞ、と緑茶を受けとる。

「ありがとうございます。済みません、客人にお茶を淹れてもらうなんて……」

「修が無事ならばそれで良い。しかしな」

喜多さんは龍を見て顔をしかめた。

「こいつはどうにも使い物にならない。修と呼ぶばかりで、役に立たのは薬を取りに走った時だけだ」

「動転してたんだよ！」

袖で顔を拭いながら言い返した龍は喜多さんを睨んでから、また俺に顔を戻す。

ぎゅっと、手を握られた。

「もう、くるしくないか？」

「ああ」

「ほんとうか？」

不意に龍の口調が子供のそれに変わる。喜多さんが眉を潜めるが、俺は無視した。

「ああ」

「だいじょうぶ？」

「大丈夫。もう倒れないよ」

手を握ってごらん。

そう言って手を差し出すと、龍はこわごわと手を持ち、表情を和らげる。

「あったかい」

「だから、大丈夫だ。それじゃあ、新しくもらった薬を持ってきてくれないか？」

「うん！」

龍が子供のようにぱつと立ち上がり、駆けながら笑みを見せた。

彼が飛び出したのを確認した喜多さんは、俺を見た。

「修、あれは？」

「何と言えばいいのか……」

龍がああなつたのは、かなり昔に遡る。きっかけは親の死だった。「一時期、あいつが植物状態になってそのときに俺が世話して、それからです」

「依存、か？」

「依存も、でしょう」

龍は、昔ほどではないが、自分に何があってもどうでもいいという姿勢は変わらないのに、俺を一番に考えてくれる。時折、一種の宗教徒にしか見えなくなる。

そして、心が揺れると、言動が子供に戻ってしまう。

「この頃見せないようになっていたから、もう大丈夫かなと思っていたのですが」

残念そうに言っているも、内心俺は龍が疑いもなく、無心に慕ってくることに喜んでいる。

俺は嫌なやつだ。植物状態だから付きっきりで看病すると言い張って、龍を隔離した。その上で、あいつを付きっきりで看病して、信頼を刷り込んだ。病弱で外に出たことのなかった俺の、最初の友

達にした。さらに、龍を通してあいつの友達とも仲良くなった。

俺に依存するとは、看病していた当時は思ってもいなかった。だが、これで龍が友達になつてはくれないか、そういった打算が無かつたとは断言できない。

喜多さんは悲しそうに俺の話を聞いている。何かをするわけでもない。しかし俺は、喜多さんに聞いてもらえて良かったと思っている。

「喜多さん、龍をお願いします」

彼は怪訝そうに俺を見る。しかし、こればかりは託しておかなければ気が済まない。

「あいつが三十路になるまで、俺の体が持ちそうにありません。だから、あいつを誰かと結婚させないと」

「依存から抜け出すのを待つか？」

「待ちたい。でも……多分待てない」

自分の身体は自分で管理している。今回のようなとっさで衝動的な発作は反応し難いが、無茶なことはやらないで生きてきた。

だが、その終わりが見えてきたのだ。

身体の端から感覚が消えていく。時折、胸に鈍痛が走り、違和感に立ち止まればたちどころに痛みは襲いかかってくる。

身体が云っている。

もう長くないと。

「誰と結婚させるべきか……龍さえ納得してくれたらいいんですよ。ほら、あいつって腹が立ちますが美形だし腕も強いし良いやつだから。欲しがる家は多いし」

ふむ、と言う喜多さんは頷いた。

「善処しよう」

「お願いします」

「うむ。それより修よ」

喜多さんが真顔、しかも怖い顔で、俺を見る。

「一つだけ、いいか？」

「何でしょうか？」

「恐らくお前さんには精神的な衝撃が大きい。それでも言っているのか悪いのか、しかし、いつかは誰かが言わねばならんことだ」

喜多さんが初めて、煮え切らない、言い淀む姿を見る。それがとても苛々とした。

「言ってください」

「では言おう。修よ」

気遣わしげな彼は、俺の顔を指差しながら、言った。

「女人は、役人には成れんのだ」

俺は、全身の力が抜けた。

———
そんな

じゃあ、

「修ッ!？」

黒　　龍　　涙

あれ　何　　　泣いてる？

俺　声　出　　　？

暗

それに、

俺は、どうすればいい？

s i d e : H e i s b a r g a i n i n g m a n ? (前書き)

H e i s b a r g a i n i n g m a n ?

彼は 交渉男？

side: He is bargaining man?

「藤掛、客だ」
ふじかけ

「俺につすか？ 宋江の旦那じゃなくて？」
そうじゅう

俺は藤掛義樹。
ふじかけよしき 宋江の旦那に使える従者だ。で、旦那が今寝込んでおられるから、代わりに役所という戦場に放り込まれて日々戦っている。ぶっちゃけ、俺の死に物狂いの采配と仕事についていける奴がいて良かったと胸を撫で下ろす毎日だ。

そんな俺に会いたい人間。何人かは頭に浮かぶが、今わざわざ役所を通して来るほどきつちりした人達はいない。

..... 思つて悲しくなつた。

「宋江さんにも客は来てる」

「え、旦那まだ人の顔見たら倒れますよ！？ あんまり人前に出せる状態じゃ.....」

「大丈夫大丈夫」

いきなり、だつた。

目の前に細身の男が立っていて、こっちを観ていた。糸目で目は見えなかったが、視線は感じている。

俺は従者だ。旦那の警護も仕事だ、だから腕つぶしも鍛えたし、自信がある。なのに、気配も悟らせず、奴は居た。

「あいつ、普通の人間ほど気配無いし」

「..... そう言う貴方は、どなたで？」

「風谷つて言います。風谷剛」
かぜたにつよし

ひよろりとした外見からは創造できない、強者を想像させる名前だ。

そして名前負けしているとは、俺は思わない。

「俺が藤掛義樹です。部屋を移しましょう」

「いや、いいよ。そんな大した話じゃないし。私は通達、君の旦那に話に行った方、あっちが本命」

本命、ときたか。

俺はじつ、と風谷を見つめる。すると彼は見返してきて、にへらと笑った。

「いいねえこの感じ！」

「は？」

「イヤね、君の事遠くからチラツと見ただけだったけど、やっぱり私のカンは外れてなかったじゃないかと思うわけよ」

訳が分からない。

ただ、会話で分かったことがひとつ。

私と名乗るのは、たいていが役人——しかも高級臭い。

俺の考えを読んだのか読んでないのか、風谷は話を切り出してきた。

「それで、だけど」

「はい？」

「君さ、真剣に首都に来て、正式な役人として、働かない？」

「……………」

今、何ト仰ラレマシタカ？

「はあああああああああッ!？」

つまり、と呟きながら、目の前の御仁いじんは白湯に薬を入れて飲む。

苦いのか顔をしかめる様子は愛嬌があり、図体がでかくせに、妙に調和している。

「うちの従者を国に譲って欲しいと」

「要約すれば、そうなりますな」

あまみや
雨宮は焦れていた。

この間にも、自室には書類の山が積まれているのだ。暢気にするなど言いたくなり、しかし自制する。

「私の一存では、決められませぬな」

私、の一人称に違和感を覚え、すぐにその理由に思い立った。

宋江は、そんなに出世していない。雨宮に気付いた宋江は僅かに笑った。

「自らに課しているのです。民が少しでも楽な暮らしが出来るように」

彼はちよつと舌を出す。

「自分で私と名乗ってしまえば、周りから……民からも同僚からも偉く見えるように頑張るしかないでしょう？」

雨宮は思わず吹き出した。

上手い、というか、茶目っ気がある、というか。

いつの間にか、彼を好いていた。

「なるほど、だから『自らに課している』のですね」

事前に、この宋江の仕事振りと民からの評判を聞いてきた。仕事振りも良く、評判もかなり良い。

今回獲得に乗り出した藤掛は、孤児院に居たのを宋江が探し当て引き取ったのだという。何でも、知り合いの息子らしい。

「ええ」

ころころと笑う様子は、やはり何故か子供を連想させる。

瞳が、子供のように生き生きと輝いているから、だろうか。

「今の仕事が好きですか？」

「いえ」

「何故？」

聞くと、ぷうつと頬を膨らませて答える。

「私には救えない民が、私の手のひらから溢れてしまう民が多すぎるのです」

「全員を救うことはできませんよ」

「承知しております。ですが」

宋江は、真っ直ぐに雨宮を見つめた。その、純粹さに、胸が騒いだ。

「民を少しでも多く、救いたい。そう思うことはいけませんか？」
警報。

何かが、おかしい。

何か、決定的な、もの。

何かが、足りない。

だが、同じくらいの規模で、彼を好く自分が居る。

「雨宮殿は」

宋江の声に引き戻された。

「……は、い？」

「雨宮殿は首都から来られたと仰られましたね。禁軍槍術師範の林冲は元氣ですか？」

林冲。今最も、反乱に関わっていると思われる男。頭に衝撃が走る。

目の前の御仁は、嫌そうに薬を睨んでいる。どこにも違和感などないのに。

何かが、おかしい。

「林冲ですか。元氣ですよ。ただ……」

雨宮は宋江を、試した。

「林冲を捕縛しようという動きが出ていまして」

宋江は目を丸くして、叫んだ。

「なんですって!？」

風谷はくつくつと笑う。

「君の仕事に惚れてしもた。で、欲しくなった。それが真相。おけ?」

「……………変態?」

「どうも。どうせ男としかやりたくない男ですとも」

「ソツチかつ!!」

藤掛が下がりながら、むしろ風谷から離れながらそして青くなりながら突っ込む。

「そんな男の下で仕事したくねえー!! 旦那、頼むから拒否って

くれ!!」

ぎゃーすか言いながら頭を抱えた藤掛はで、と今までの話を無視して風谷を見た。

「旦那には幾ら出る?」

「わぁ金の無心!」

「だって、あの人には恩あるしなあ。納得するぐらい出してくれたら、俺からも旦那に言いますよ」

しかし風谷はそんなことだろうと思い、さっと金額の書いた紙を差し出す。

「一年で考えてね」

「銀二十かよ……なーんか、決定打が無いんだよな。もう一声」

ちなみに銀が十五あれば、並の人間なら飲んで遊んで暮らせる。しかしそう言われ、風谷は悩みながら右に線を一本足した。

「……………」

銀二十一。

「てめえ嘗めてんのか!? あア!?!」

「藤掛落ち着け! お偉い様だ! 頼むから殴るな!」

遠巻きに眺めていた同僚らしき男が、殴りかかろうとしていた藤掛を羽交い締めにする。藤掛はまたぎゃーぎゃーと騒ぐ。

風谷は諦めて、叫んだ。

「仕方ない、男は度胸、もってけ泥棒!! 銀三十でどうだ!?!」

「乗った!?!」

藤掛の顔が輝き、手が差し出される。

その手を握りながら、風谷はふと、今首都で起きているだろうことに思いを馳せた。

単刀直入にそれを表すとしたら。

禁軍槍術師範、林冲、捕縛。

s i d e : H e w a s a r r e s t e d b y g o v e r n m e n t .

H e w a s a r r e s t e d b y g o v e r n m e n t .

彼は政府によって捕まった。

Side: He was arrested by government.

林冲は時折感じる戴宗の白い目を無視しつつ、妻の張藍との数少ない休日を謳歌していた。

「旦那さま、あの野菜がきれいです」

「そうか、なら買おう」

二人（プラス一人）は屋台市場を見に行っていた。荷物持ちは禁軍からつけられた一人の従者だ。ちなみに林冲と妻の手は繋がれている。

林冲はふと、屋台の一つに目をやって、目を見張った。

「張藍、張藍」

「はい」

振り向いた彼女の首に首飾りをかける。

「これなんかどうだ？」

張藍ははにかんだように、微笑んだ。

「似合っていますか？」

「とても。よし買おう」

こんな時にしか散財できない身だ。思う存分休日を満喫してやろう。張藍にも、日頃あんまり接したりできなかった、その分甘やかせてやろう。

そう腹に決めた林冲は、さっそく首飾りを買って求める。

そんな彼に声をかける者がいた。

「おやおやこれは、林師範ではないか」

（うわっ）

内心とても嫌になりながら振り返る。そこには、林冲が大嫌いな高球が立っていた。

この高球、賄賂が大好きな腐れ外道だ。蹴鞠で当時皇子だった現皇帝に好かれて高官拔擢。何万人が理不尽だと叫んだことか。

その腐れ外道はにやにやと笑いながら歩み寄ってきた。

「奥方と休日をご過ごしているのか。私を見たたん顔を歪めたのはそのせいかな？」

「妻をあまり、人前に出すことはなかったの………いささか驚いてしまってます」

この場合の「人前」とは、禁軍の人間を指す。張藍を役人に見せたこともない。

このアホウ
高球のように、舐めまわすような顔で妻を見るような人間が出てくるからだ。さらに後ろに居た高球の息子も同じような顔をしている。

先ほどの台詞に「てめえに見せなくなつたんだよクソツタレ」との感情を込めたのだが、空気が読めないのか、空気を讀まないのか、親子そろって全く気付かない。

張藍が怯えるように林冲の背中に隠れたところで高球が我に返り、取り繕うように笑った。

「確かにお前の妻は、他人には見せたくないほどの美姫だな」

「ありがとうございます」

そのときはそれで話題を逸らして、さつと親子から逃げた。

だが。

これから数日後のこと。

少し林冲が早く家に帰ったとき、家の玄関から男女の言い争う声

……もう一つ述べるならば、張藍が男に困っている声が聞こえた。

足早に駆け付けてみると、

「あつ」

「り、林師範」

男は、高球の馬鹿息子だ。

あれか、妻に惚れたか。高球は不貞を止めないのか、止めないだらうなああの馬鹿なら。

なら殺す。殺して張藍と逃げる。

仕事帰りで持っていた槍を握ると、馬鹿息子は真っ青になって何やら訳の分からない言い訳を並べて逃げていった。

しかし、この言い寄りプレイボーイは何日も続き、いい加減嫌になった林冲は大きく休日を取り、張藍をあまり外に出さなくなった。玄関で馬鹿息子を追い返してしまえ、という算段である。

しかし、どこで悪知恵をつけてきたのか。

訪ねてきた師範仲間が、高球からの書類をこっそり持ってきた。もちろん下らないものばかりだ。林冲はそれを片付けることに忙殺するしかなく、しばらく林冲が玄関に出ていたのに、また張藍が出るようになった。

そんなとき、事件が起こった。

林冲は書類を片付ける手間、腕が鈍らないよう、自宅で槍を振っていた。その矢先、従者から訪問の声があつて、妻が顔を出す。

しばらく静かだ、馬鹿息子でないのかとほっとした林冲。

その安堵を切り裂くように、張藍が訪問相手に声を荒げた。まさか。

また、問答が聞こえる。林冲は槍を持ったまま、馬鹿息子を追い払おうと玄関に顔を出して、

心臓に短剣を突き立てられた、張藍を見つけた。

「張藍？」

いつもは返事をする彼女が、返事をしない。ちょうらん、ともう一度、呼ぶ。

あの馬鹿息子が、震えながら腰を抜かして、玄関に座り込んだ。

「わ、私は、彼女を脅すつもりで短剣を突きつけて、て、手が滑つて、」

そのまま刺したのか。
手が、勝手に動いた。

槍が、馬鹿息子の心臓に吸い込まれていった。

「林冲！」

真つ青な顔で戴宗が飛び込んできて、林冲を見る。見て、視線を張藍、馬鹿息子に移して呟く。

「刺したのか」

「ああ」

志は残っている。しかし今はそれよりも、張藍を喪った、それに全ての神経が向いていた。

「戴宗、姿を眩ませ。俺は駄目だ」

「しかし」

「いいから、行け。あの方に申し訳ないと、少し時間がかかると伝えてくれ」

しばらく戴宗は林冲を見ていたが、ややあつて踵を返した。

それから叫び声が聞こえて、役人が来て、林冲はあつという間に引つ立てられて、取調室にいた。

妻が恋慕で刺されて、それに怒った自分が槍で刺した。何度も話した。牢屋に放り込まれ、微睡む度に張藍の夢を視て、飛び起きた。狂ったように叫び、のたうちまわり、気が付けば最下層の牢屋に入られていた。

何日経ったか分からない頃。

取調の役人がいきなり立ち上がり、入り口に向かって頭を下げた。「頭を下げる必要は無いですよ。私はただのパシリだし」

現れたのは、ひよろりとした男だった。まだ若く見える。

風谷と名乗った彼は、役人と代わって席につき、そんじゃあ、と口を開いた。いきなり口調が傲岸不遜なそれに変わった。

「うーん。……残念だよ、林冲。誠に残念だ。槍で勝る者がいないと謳われた豪傑が、たかが高官の息子を殺した如きで命を落とすとはね」

どうやら、死罪は確定したらしい。

内心あの方に詫びた。

「ねえ、林冲」

しかし。

風谷の目が猫のように歪む。口元が弧を描く。

「無罪に、してやろうか？」

囁くように尋ねられた、悪魔の問い。

「なあに、たった少しのことを、話すだけで良いんだ。幸い私は、それなりに高官だね。蔡京様に話して無罪にするぐらい、わけもない」

ゆつくりと、言い聞かせるように語る。

林冲は、催眠術にかかるかのように、その声に聞き入る。

「何を話すか？ そうだね、では……」

風谷はにっこりと微笑んだ。

「お前が牢役人兼飛脚屋の戴宗と、どのように知り合ったのか。もしくは、花和尚と呼ばれている坊主が何者なのか、話して。出来るだけ詳しく」

頭を鈍器で殴られたような、激痛が走った。それと同時に、納得した。

こいつが、黒幕だ。

こいつが、これらの事を聞こうとして、答えざるを得ない状況にするために、高球の馬鹿息子をそそのかしたのだ。

それと同時に、頭が回転を始める。

今この状況で、できることは何か。

結局、林冲は口を引き結んだ。

何も話すものか。

N e w s (前書き)

n e w s ニュース

また修が倒れた。隣の部屋に居た薛永先生は、せつえい身体的な負担からではなく、精神的なショックで気絶しただけと仰った。

安心できるかボケエ！

そんな俺の心境がばれたのか、先生は苦笑して、まー、と凄くノンビリ話す。

「まー、この頃疲れてたんでしょーねー、修さんにとっての回復はー、何からも断絶されて眠ることでしょーし」

用は、修は眠って回復している、そう考えてみるってことらしい。「ですからー。むやみやたらに揺り起こすのもー、非常事態だけにした方がいいんですよー」

そう言って先生は薬をせんずる為に、向こうの部屋に戻った。

それを見計らったかのように、喜多が頭を下げる。

「済まん、龍！ 修は俺の話を聞いてショックを受けてしまったのだ」

「何を聞かせたんだよ」

「女人は官吏登用試験に参加出来ん」

思わず俺はうめいた。

「……………それ、本当なのか？」

「本当だ」

役人登用試験。修が目指す役人になるには一番てつとり早い方法だ。

何にせよ、これで修がダメージを受けたことに変わりはない。夢のなかで、修は整理をつけてんだろうか。

昔、助けてもらったのに。なのに、俺は修を助けてやれない、それがとても悔しい。

「誰も彼女に教えておらんようだったから、言い方は悪いが……………」

… 早めに真実を伝える必要があると思ったのだ」

誰かが言わなければならい話を、喜多が言ってくれた。

少し、喜多を見直した。

「なあ喜多。修は起きてくんだろ、少しだけ、旅の話を聞いてもいいか？」

喜多は心配そうに修を見ていたが、やがて俺に視線を合わせて、にっと微笑んだ。

「分かった」

そのとき。

「花和尚はいるか!？」

乱暴な、というよりかなり慌てた足音。それに眉を潜めた喜多が声を張り上げる。

「ここだ、戴宗」

障子が開いて、息を切らした何か凄く具合の悪そうな兄さんが立っていた。戴宗と呼ばれた兄さんは布団で寝ている修を見て一瞬済まなそうな顔をしたが、喜多に視線を移すときにはその表情は消えていた。

「騒がしくして済まない」

「何かあったのか？」

「林冲が捕らえられた」

喜多の表情が、がらりと変わった。

「何の罪でだ」

「高球の息子を殺した。その息子は林冲の妻を殺したから、情状酌量で直ぐ出てくると思ったのだが……………」

「高球だ、許すはずがない」

喜多が話の締めをくくる。

高球の名前は聞き覚えがあった。

林冲も、確か武術師範だったはず。

「待てよ、高球ってあの…………… 凄く最悪な？」

そこで戴宗は初めて俺に気付いたような顔をする。失礼だなオイ。

「この青年は？」

「萩原龍。ここで寝ている浅倉修の一の親友だ。合ってるな、龍？」
「おう」

一の親友って他人に言われて、場違いに嬉しい。戴宗もそんな俺に気付いたのか、口元で笑った。目は病んでる人のソレだけだな。

「で？ その林冲って人は捕まったままなのか？」

「ああ。それで、だな……………」

戴宗が苦しそうな顔でしゃがみ、喜多に報告した。

「雨宮が動いたようだ」

「……………やられたな」

雨宮、という人間にも聞き覚えがある。

「雨宮って、忍者みてーなのを一杯手下にしてる人か？」

聞くと、二人が目を丸くして俺を見た。

「何で知ってる？」

「進先生と浅倉のおっちゃんの会話に出てきた」

その答えに安堵した二人。いや、安堵してる暇はないんじゃないかねえのか？

「じゃあ、その林冲はピンチなのか？」

「うむ。……………と、戴宗」

戴宗が視線で気付いたけど、困ったような顔で首を振った。

「あの人は、動かぬ」

「だよなあ……………」

がつくりと頂垂れた喜多に「あの人が誰なのか聞いてみたい。

でも、聞いたら、後戻りができないような気がしていた。

まだ、俺の帰る場所は修のところなんだ。

しばらく俯いていたが、何故か会話が聞こえない。不思議になつて顔を上げると、二人が俺をじつと見ていた。

俺も黙って二人を見ていると、やがて喜多が笑って戴宗にほらな、
と言う。

「龍はまだ駄目だ」

「何が駄目なんだよ？」

二人とも笑って答えない。

諦めた俺は、立ち上がって部屋を出た。歩く振りをして、二人の会話を聞く。

「……………お前な」

戴宗の呆れたような声。

「龍君にあそこまで勾わせてそれは無いだろう」

「いやなに、存外あまり気付いておらぬと思うぞ？」

何がだ。うん、喜多の言う通り全く気付いてないぞ、俺。

外で盗み聞きしている俺をよそに、戴宗は深く息を吐いた。

「……………少しでも味方は欲しいが」

「戴宗お前、龍と一緒に浅倉將軍も引つ張り込みただけだろう」

「分かったか？」

引つ張り込む？　なんだそりゃ。

「いや、それよりだな」

「何だ、他にも何か知らせがあるのか？」

「雨宮と部下の風谷が、宋江殿の屋敷を訪ねたらしい」

部屋の中の空気が、ピンと張り詰めたように静まり返った。

「……………雨宮は何の用事で宋江殿の元へ？」

「義樹を国にパチられた」

「なんだと！？」

パチるってどういう意味だ？

分からずいきなり早口になって話に置いていかれたので、俺は諦めてこっそり薛永先生を訪ねに行った。

「なあ薛永先生、パチるってどういう意味だ？」

「えーとですねー、盗む、ですかねー。黒辻さんがよく『軍の食糧をパチる』って言いますからねー」

うん？

黒辻さんもその義樹って人も、マズインじゃね？

H e k n e w t h e m a n w h o i s e n e m y . (前書き)

H e k n e w t h e m a n w h o i s e n e m y .

……彼はその男性が敵だと知った。

H e k n e w t h e m a n w h o i s e n e m y .

えー、藤掛義樹です。

あれあれよと話が纏まって、まだ回復してない宋江の旦那が真っ青な顔で仕事に戻って、気付いたら馬車に乗っ取りました。風谷は先に帰ったけど、あいつ俺に投げキスとかしてきやがった。マジキモい。全部避けてやった。

それより、だな。俺は上司の顔をじつと見てみる。

すげえ美形。馬車に乗るときに小柄だって気付いたけど、それが気にならねえぐらい美形。語彙が少ない俺に表現のしようはないが、目鼻が整っているわ、すらりとしてるわ、うん、とにかく美人。

名前は雨宮創也さん。あみやそうやさっきからずっと手元の書類（冊子が束！）を見ては床に置いてる。で、馬車はガタンゴトン揺れるから、そのせいで書類が馬車の床に散らばっている。むしろ紙の海。

踏むとヤバそうなんで俺は早々に足を抱えてんだが、雨宮さんは足が書類に埋まっても気付いてない。

凄く集中してる。

「……………君」

耳に、俺の名前が入ってきた。

「藤掛君」

「は、はいっ！」

雨宮さんは少し苦笑して、馬車の床に広がる紙の海を指差す。

「君の仕事にも関係することばかりだ。読んで種別別に揃えてくれ。思ったことは何でも意見してほしい」

……………この人、鬼だ。

内心そう思いながらも、にっこり笑って紙をかき集める。

「俺の事は藤掛でいいですよ」

「分かった」

雨宮さんはまた苦笑して、額に手をやる。

「部下を持つのは初めてでね、要領が分からない。何かあったら聞いて欲しい。……風谷も便宜上は部下だが、あれは同僚に近いからな……」

あのウザイ姿が浮かび、とりあえず脳内から消しといた。

「……あれを部下にするのは結構難しいと思います」

「全くだ。今、身をもって感じている」

雨宮さんがしみじみと言う。

それから、まだ気にかかることがあったので、書類を読みながら聞いてみた。

「で、俺が配属されるのはどこなんですか？ 風谷……」

「……さんも教えてくれなかったんで」

「嫌なら呼び捨てでいい。あいつ本人は気にしない。それで、配属か……」

やや雨宮さんが黙り、そうだな、と視界の端で顔を上げた。

「国を裏で支える組織、とでも言うべきか。唯一都で汚れていないという妙な自負がウリだな」

「名前は？」

「無い。たいていの工作は我々がやっている。部下と言えいいのか……間者（忍者みたいな奴だ）を組織で雇っている。他には、そうだな、私の仕事は賊徒をのさばらせつつ、反乱の目が出ないように目を配る事か」

「具体的には……やっぱり間者を使いますか？ あと地方の將軍とか。童貫將軍は動かないって聞きますよ」

童貫將軍って人は、禁軍……帝さんを守る軍の総司令官みたいな役職にいるらしい。噂だと戦バカで、調練ばかり繰り返しているらしい。

「童貫將軍も頑固でな……反乱軍が出来ない限りは戦に出ない

おつもりだ。『帝を守るのが我々禁軍の仕事』だったかな。君が仕事に慣れてきたら会わせたい」

「うわー、すげえウザいおっさんだな。会いたくなくなってきた。それが顔に出ていたらしい。雨宮さんがまた笑った。」

「そう嫌な顔をするな。……………高球將軍の方が会いたくないだろう、それを考えれば童貫將軍なんぞただの五月蠅いおっさんだ」

本音がポロリと出たみたいだ。雨宮さんは咳払いをしてから、話を本題に戻す。

「それから藤掛、君の言う通りだ。間者を使う、もしくは地方の將軍に依頼する。だが、今のメインは……………『闇の金』のルートを突き止め、かつ道を潰すこと、さらにその首謀者を突き止めること。そして最近妙に規則的になってきた賊が何を考えているのか、そこまで出来たら万々歳だな」

闇金ね。普通の金とは別に、どつか国以外に金が流れ込んでるんだっけか。

「その金が犯罪に使われてたら、泣くしかありませんね。あとこの冊子の報告書のココ。地域的には宋江の旦那が勤めてた……………えーと……………駄目だ忘れた。あそこらの範囲ですけど、こんな金の関所、旦那ん役所の報告書には出てきたことありませんよ」

「なに？」

雨宮さんの目が強く輝いて、身を乗り出してくる。俺が繰り返す、この関所が怪しいことをもう一度言つと、雨宮さんは頷いて笑みを浮かべた。

「即戦力になりそうで、何よりだ」

「これは従者やってたから分かったことですって。一ヶ月は馴染むためにピンからキリまで、何から何まで目え通すでしょうし、使い物になるのは半年後じゃないですかね？」

本当にそこまでかからせるつもりはない。だが、そのくらいの見積りでやってもらわないと、俺はスローペースなんで初めの方は本当に使い物にならない自信がある。

それを話すと、雨宮さんはまったくすくすくと笑って了承してくれた。

なんかすげえところで馬車を降りた。とりあえず豪華で、なんかすげえ。さらにデカイ。で、コワモテな雰囲気醸し出してる。

すげえすげえ連呼してたら、雨宮さんに頭を叩かれた。

「静かに。ここが首都に唯一ある役所だ。禁軍とも繋がっていて、地下には禁軍の牢がある」

後について行くと、サーツと塩が引くように役人達が道を開けていく。

「雨宮様、お帰りなさいませ」

「雨宮様、どのようなご用件で？」

「雨宮様、娘が……………」

雨宮さん、そいつらの用件全員無視。娘って何だ。

「雨宮様、そちらの方は新しくつかれた従者の方ですか？」

この質問は、俺を聞いてるんだろう。が、雨宮さんはこれも無視した。

「話していたらキリがない、かつ下らない。それにもし使える部下になる予定の若者だと言ってみる。あれよあれよと賄賂が来るぞ」

「うわっ……………要らねえ」

思わず呟いてしまった。

雨宮さんがノックしたのはかなり奥の、文官より武官の姿が目立ち始めたあたりの部屋だ。

顔を出したのは、風谷だった。

「や。藤掛もようこそ」

「風谷、どうだ？」

「どうもこうも」

後ろ手に扉を閉めた風谷は手を肩の位置まであげて、降参のポーズをとる。

「ずーっと黙秘。唯一、事件の内容だけ話したり話さなかったり」

雨宮さんが眉を潜め、考え込んだ。

「お前のカンでは、どう思う？」

「限りなく黒に近い灰色。ただ、彼を別の牢城に放り込んでそこに集まってくる人間を見てもいいと思うけどな」

驚く様子もなく頷いたところを見ると、雨宮さんも同じことを考えていたようだ。二人は一斉に俺を見た。

「「藤掛（君）はどう思う？」」

「……………あの。そもそも、何の話をされているのか分かりません。誰かを捕まえたんですか？」

二人の視線に耐えきれずにばらすと、風谷が教えてくれる。

「ある武官が、高官の息子に妻を殺されて、その息子を殺した。ただ、その武官は昔から私達の間では反逆の疑いが強くてね。彼に無罪にするから知ってること全部吐いてつて言っても黙秘なんだ」

「殺して後の憂いを亡くすべきか、牢屋に放り込んで骨の髄まで利用するか」

……………言い方悪いな雨宮さん。

そこまで言われる武官が誰なのか、俺は知りたくなかった。

「その武官は誰なんですか？」

「武術師範、林冲」

静かな癖にサバサバした雰囲気撒き散らすあの兄ちゃんだ。

「宋江の旦那繋がりで会ったことがあります。反逆ですか……………」
きらん、とばかりに風谷の目が輝く。

「へえ、知り合い？」

「はい」

「どう？」

どう、とは多分黒（クロ）なのか一白なのか、でいいんだろうな。
「よく分かりませんけど……………正直、林さんの性格って単細胞なんですよね」

ぶ、と風谷が吹きかけて堪えた。

「だから、反逆だのにまで考えが及んでいるんだろーかと思いまし

た」

確かに、と雨宮さんが遠い目で呟く。

「休日を見張らせていたが、ずっと妻にベツタリだったからな……

……イチャイチャもしていたと報告が来ている」

「流石、葉仙軍愛妻家第三位だよねー」

「何ですかそれ？」

「飛脚屋が、仕事のついでに下の文官武官に聞いたらしいよ。葉仙軍で有名な愛妻家はつて。それで集計とったらしい」

風谷がくすくすと笑いながら答える。

「ちなみに林沖は愛妻弁当を幸せそうに食べていたのが決め手だったみたいだね」

だからこそ、今回のこれは林沖が可哀想だ。だが、もし反逆に加担していたなら、遠くない未来で、奥さんはやっぱり亡くなっていたかもしれない。

「……………仕方ないですね。林さんも骨の髄まで利用した方が良さそうです」

そうか、と言って雨宮さんは扉を開けて部屋に入る。風谷が後に続き、俺を手招きした。俺も入り、正面に座る彼を見て、思わず息を止めた。

何も言わない、ただの骸むくろのような無表情。水しか与えられていないのか、落ち窪み痩せ細った身体、顔。昔の快活な面影は残っていない。ただ、目だけがギラギラと異様に輝いていた。

林さんは俺を見て一瞬眉を動かしたが、また無表情に戻る。雨宮さんは見逃さなかったようで、俺をちらりと見てから林さんの向かいに椅子を置いて座った。

「うちの新人りと知り合いだったようだな」

無言。

ただし、俺個人に向けて刺すような視線が飛んできた。林さんは俺にどうしろと？

気付かない雨宮さんはしばらく反応を待ってから、それでは、と

尋問を開始した。

「もう一度聞こう。お前は載宗とどこで知り合った。花和尚は何者だ」

俺の心臓が跳ね上がった。

やばい。心臓が爆音をたてながら動いてるようにしか感じない。

俺はやっと、俺自身がどこに来てしまったのか気付いた。

花和尚の本名は喜多要。

村ぐるみで盗賊をやった俺の両親の知り合いで、……………

両親が死んだあと、宋江の旦那に俺を養うよう頼み込んでくれた、俺の恩人だ。

どうするよ、俺？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0139j/>

奇譚—大地を翔る

2010年10月12日20時03分発行